
ワールドバトル

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドバトル

【Nコード】

N2063W

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

ワニノコたちが通う学校の朝会で、クラス対抗バトル大会が開催されるといふ。そこから代表者を決定し、国内大会に参加するメンバーを決定するというのだ。ワニノコやヒノアラシ、チコリータたちは、メンバーになろうと必死に戦い、メンバー入りを果たす。そして、国内　さらには世界の大会へと参加していく……………ポケモンがトレーナーになる異色小説シリーズ第三作。

第01話 「序幕」

ワニノコたちが住んでいる町セントタウン。この学校にワニノコたちは通っていた

ある日の朝に朝会があった

「あゝあ。寝み……」

ワニノコはあくびをしながらその朝会にのぞんでいた

朝会の話しは長く、全員立っていることから面倒なのだ

そして、メインである校長の話が始まった

ワニノコはまるでたちながら寝そうなほど目が閉じていた

その時、校長であるフーデインの話しの内容が変わった

「えゝ急ではありませんが、明後日、クラス対抗のバトル大会を開催します。詳しくは今日、担任の先生から話しを聞いてください」

「え？ バトル大会!？」

ワニノコは校長のその話しを聞いたとたんに重いまぶたを一気に上げた

その話しで朝会は終わったためワニノコはその目のまま教室に戻った

教室に戻ったワニノコは席に座っているヒノアラシのところに行った

「聞いたかヒノアラシ？」

「さっきの大会のこと？」

「そうさ。楽しみだな」

「そう？ 僕はそんなに楽しみではないよ」

「なんだよつまらないな。まあ、ヒノアラシはバトルはそんなに好きじゃないからな」

「そう言うこと」

「じゃあ、大会のためのバトルの練習につきあってくれないか？」

「それならいいよ。いつも通りだよな」

「ああ」

ワニノコとヒノアラシは二人でよくバトルの練習をしていた。ヒノアラシはあまりバトルは好まないのだが、その練習だけは必ずやっていた

学校でトップクラスのバトルの強さを持つワニノコと戦っているせいか、ヒノアラシはバトルは強いのだが自分ではそれを意識していない

だからなのか、あまりバトルしても負けてしまつと後ろむきな思考

なため、バトルはあまり好きではないらしい

そんな会話をしていると担任の先生である、ヤドキングが来た

「席に座れ」

そういいながら入ってきて教卓の前まで行き、机の並んでるほうを向いた

それを見たワニノコは一番後ろの窓側にある自分の席に戻った

「さっきの校長先生の話聞いたと思いますが、明後日、クラス対抗のバトル大会があります。このバトル大会というのはクラス全員が参加し、トーナメントの勝ち抜き戦で行うことになっています。この時間は出場の順番を決めたいと思います」

「先生。順番はどう決めるんですか？」

ワニノコが後ろの席から大きな声で聞いた

「くじ引きで決めます。ここにくじを持ってきましたので引いてください」

先生はそう言うと、廊下側の前からくじを引かせて行ったため、ワニノコは最後に引く機会がなく、あまったものになってしまった

ワニノコはそれを開くと『7』と書かれていた

「七番か。遅いのか早いのかわからない番号だな……」

ワニノコはそうつぶやいた

それから先生が順番を聞き出していった

「一番はニューラ。二番……。三番……。四番……。五番……。六番ヒノアラシ。七番ワニノコ。八番……」

先生が聞き出した順番をまとめ繰り返した

そうしているうちにこの時間が終わったため、休憩時間となった。休憩時間になったらワニノコはヒノアラシのところへ行った

「ヒノアラシは六番か。いいよな、俺は七番だぜ」

「一つしかかわらないじゃん」

「そうだけど、一つは大きいよ。ヒノアラシもバトル強いしな」

「僕はそんなに強くないよ」

「いや、結構強くなってきていると思うよ。だから、ヒノアラシまで来たら俺の出番なしだと思う」

「お前の出番はねえよ」

ワニノコたちが話しているとニューラが近寄ってきて、そう言った

「なんせ、俺が一人で全員倒して、お前らの出番はなくなるんだからな」

「そう一人でできるわけないだろ」

「ふん。俺の手にかかれば簡単だぜ。お前らはゆっくりしてやがりしてな」

ニユーラはそう言つと教室を出て行つた

「なんなんだ？ あいつ」

「ニユーラも結構強いからね。自信があるんだと思つよ」

「俺よりか強くないくせに」

それから授業が始まり、時が流れた。この日は偶然にも五時間授業だったため、すぐに帰ることができた

帰ったら二人ともいつも練習をしている町外れの草原へと向かい、そこで練習をするのだった

次の日も学校へ行ってからその場所で練習をしたのである

そして、大会当日

大会は朝の会を終わらせてからだったのでワニノコたちは教室にいたワニノコはいつも通り、ヒノアラシと今日の大会の話話を話していたときだった

「二人とも」

後ろから声が聞こえたので二人とも後ろを振り向くとそこにはチコリータがいた

「おはよう、チコリータ」

「おはよう。二人とも知ってる？」

「なにをだよ」

「私たちのクラスが準優勝候補なのよ。すごいでしょ」

「準優勝候補か。自慢しにきたのか？」

「そういわないの。優勝候補がどこか知りたい？」

「俺はどうでもいいよ」

「僕は知りたい。教えてよ、チコリータ」

「優勝候補はあなたたちの五年A組よ」

「僕たちが優勝候補？」

「ええ。校内でもトップクラスの人がいるからそうだったんですけど」

「へ〜そうなんだ」

すると、チャイムが鳴り出した

「あ！ チャイムだ。じゃあね、二人とも」

チコリータはそう言いながら自分のクラスである五年B組に戻っていった

そして、朝の会で大会のルールとトーナメント表が書かれている紙がくばられ、クラス対抗バトル大会が開催されるのだった……

第一話終了第二話に続く……

第01話 「序幕」(後書き)

短編小説「クラス対抗バトル大会」の第一話リメイク版です。短編小説では『序幕編』『大会編』『完結編』と三つありましたので、この一話では序幕編のリメイクとなっています。これから、どんどん展開は変わっていきますのでお楽しみに

第02話 「開催」(前書き)

校長の話で急にクラス対抗のバトル大会が行われることになった。
ワニノコたちはバトルの練習をし、大会の日を迎えるのだった。

第02話 「開催」

ついにバトル大会が開幕した

開会式や校長の話などは一切なく大会が始まったため、ワニノコたちは喜んだが、奇妙な感じを感じた

ワニノコたちは朝の会で配られたトーナメント表を見ていた

「俺たちの相手は四年C組か……」

「うん。四年C組はそんなに強くなかったと思うよ」

「じゃあ、余裕だね」

「うん。ところで、チコリータたちの相手はどこなんだろう？」

「えっと、あ、あったあった。チコリータたちは三年A組みたいだ」

「三年A組じゃチコリータたちは余裕だね」

「ああ。五年が三年に負けることはないと思うからな」

そのとき、放送が流れた。その放送はこういうものだった

『五年A組のワニノコとヒノアラシ。至急、バトル会場Aまで来なさい。繰り返す……』

「なんだ？」

「行ってみよう、ワニノコ」

ワニノコたちが放送で言っていたバトル会場Aに向かった。するとすでにバトルが始まっていた

「先生。なんでもう始まっているんですか？ 九時半からだったんじゃないんですか？」

「九時半からだったんですが、事情により早めになったんだ」

「そうですか」

そういつているうちに一番手のニューラが相手のクラスの最後の人物を倒してしまった

バトルフィールドから戻ってきたニューラにワニノコは近づき声をかけた

「なかなかやるじゃないか」

「ふん。相手は四年だ。あんなやつらに俺が負けるわけがないだろ」

そう言うとニューラは別のところへ行ってしまった

「あいかわらず、感じの悪い奴だな」

こうして、ワニノコたちのクラスは一回戦を勝ち抜いた

それからのバトルもニューラのバトルだけで次々と進んでしまい準

決勝までできてしまった

「もう、決勝戦だね」

「ニューラだけしかまだ出てないじゃん。俺たちの出番はないのかよ」

「そういわずにクラスの勝利を祝おうよ」

「でもな。俺も一回ぐらい戦いたいよ」

「しょうがないって。そうだ！ 確かチコリータたちのクラスが準決勝をやっていたと思うよ。見に行ってみない？」

「そうだな。どうせ、ヒマだし。ところで対戦相手はどこだ？」

「確か六年A組だったと思うよ。場所はとなりのB会場だよ」

「よし。じゃあ、行くか」

ワニノコとヒノアラシはチコリータたちのクラスが戦うB会場へ向かった

すると、チコリータたちのクラス五年B組は残り一人で、六年A組はまだ誰もやられていない状態だった

「チコリータ！ がんばれ！」

チコリータのクラスメイトから声援がとぶ

「おいおい。チコリータたちが負けてるのかよ」

「チコリータたちは準優勝候補だよな？ 六年A組ってそんなに強いんだ」

「では、これよりチコリータ対ライチュウのバトルを開始します。それでは、バトル開始！」

審判のハッサムがそう言うと両方ともポケモンを出した

チコリータはフシギバナ。ライチュウはピカチュウだった

「フシギバナ！ ねむりごなよ」

「ピカチュウ！ こうそくいどうでかわすんだ」

フシギバナのねむりごなはこうそくいどうでかわされてしまった

「フシギバナ！ つるのムチ！」

「ピカチュウ！ かげぶんしんでかわせ」

ピカチュウはぶんしんを作り出しつるのムチをかわした

「ピカチュウ！ 十万ボルト」

「フシギバナ！ まもるよ」

十万ボルトはまもるではじかれてしまった

「ピカチュウ！ たたきつけるからどくどくだ」

ピカチュウはフシギバナをたたきつけどくどくでもうどく状態にした

「フシギバナ！」

「ピカチュウ！ かげぶんしんだ」

ピカチュウはぶんしんを作り出した。どうやら、どくどくで痛めつけ自分は回避する防御作戦に出たようだ

「フシギバナ！ にほんばれからこうこうせいよ」

フシギバナはこうこうせい回復をするが、威力が増すどくどくには追いつけない

「ぼくの勝ちが決まったな」

ライチュウはそういった

「（こうなったら一か八かだわ）フシギバナ！ ハードプラント！」

フシギバナはチコリータの指示を受けハードプラントを放った

「ピカチュウ！ かげぶんしんでかわせ」

ハードプラントはピカチュウのかげぶんしんであっさりかわされてしまった。そして、ハードプラントの反動でフシギバナは動けなくなってしまった

「もう終わりだな。ピカチュウ！ とどめのかみなり！」

ピカチュウはかみなりをフシギバナに放ちフシギバナを戦闘不能にした

「フシギバナ戦闘不能！ よって六年A組の勝ち」

「よっしゃ！ 決勝進出だ！」

勝利したライチュウたちは全員で喜んだ

一方のチコリータは残念そうにバトルフィールドから戻ってきた。そのチコリータにワニノコは声をかけた

「惜しかったな。チコリータ」

「あ、ワニノコとヒノアラシ。いまの試合見てたの？」

「ああ」

「そう……。私は結局負けちゃった。がんばってね、二人とも」

「うん。必ず、六年A組に勝って見せるよ」

ワニノコたちはそういって自分達のクラスメイトがいる場所へと戻っていった

準優勝候補のチコリータの五年B組が準決勝で六年A組とに負けたことにより、決勝戦はワニノコたちの五年A組対六年A組となった

そして、準決勝終了後の約三十分後に決勝戦がA会場で始まるのだ
った

「これより、クラス対抗バトル大会決勝戦を行います。出場者はフ
ィールドまで上がってきてください」

審判のハッサムがそう言うと五年A組の一番手であるニューラと六
年A組の一番手であるタツベイがフィールド上に立った

「手加減はしないぜ」

「こちらこそしないぞ」

「それではバトル開始！」

審判の合図により二人はポケモンを出した

「行きやがれ！ オニゴーリ」

「行くんだ！ ハクリュウ」

ニューラはオニゴーリ。タツベイはハクリュウだった

「オニゴーリ！ れいとうビームだ」

「ハクリュウ！ かわして、かえんほうしゃ」

ハクリュウはれいとうビームをかわしかえんほうしゃをはなった

「オニゴーリ！ かわすんだ！」

ニューラはそう指示したがかえんほうしゃはオニゴリーに当たってしまった

「オニゴリー！」

オニゴリーは弱点のため大ダメージを受けたが何とか耐えることができた

「よし。オニゴリー！ もう一回れいとうビームだ」

そのれいとうビームは見事にハクリューに当たった。しかも、れいとうビームはずっと放たれ続けているため、ハクリューはずっとダメージを受けている

「ハクリュー！ 押し返せ！ かえんほうしゃ」

ハクリューはかえんほうしゃを放ちれいとうビームに対抗した。その二つのわざはぶつかり合った末、両方とも打ち消しあった

その打ち消しあった時におきた爆風により二匹は倒れてしまうのだ

「両者戦闘不能！ 引き分け！」

「戻れ！ オニゴリー。くっそ！ 引き分けか」

「戻るんだ、ハクリュー。ご苦労様」

二人はボールに戻しフィールドを降りた

そして、二番目の出場者がフィールド上に上がりバトルをはじめる
のだった……

第二話終了第三話に続く……

第02話 「開催」(後書き)

今回は大会編がメインで、最後の方は完結編の最初のほうをくっつけました

第03話 「新たなる戦い」 (前書き)

準決勝で5年B組が負けた六年A組と戦った五年A組だったが、一番手のニューラは相手の一番手のタツベイに引き分けるのだった

第03話 「新たなる戦い」

二つのクラスがぶつかり合う中。どんどんとやられていく

相手は六年であるということ、五年のワニノコたちには少し不利だと予想されていたが、その予想は的中だった

六年A組の二番手、三番手は5年A組の二番手から五番手で何とか倒すことができた。しかし、六年A組の四番手はチコリータを負かしたあのライチュウだったため、五番手は前の戦いの疲れもあるのかすぐに倒されてしまった

そして、ヒノアラシの出番がきたのである

「ヒノアラシ！ がんばれよ！」

ワニノコがヒノアラシを応援する。もちろん、クラスメイトも応援をしている

「それでは、試合開始！」

審判であるハツサムの声が響いた

「行くんだ！ ダグトリオ！」

「行け！ コモルー！」

ヒノアラシはダグトリオ。ライチュウはコモルーを出してきた

ヒノアラシはチコリータが戦っていたピカチュウと予想してダグトリオを出したようだがその読みはずれてしまった

「ダグトリオ！じしんだ」

しかし、ヒノアラシは戦う意思を見せながら戦った

「コモルー！ かげぶんしんでかわすんだ」

コモルーはかげぶんしんをしたがじしんをかわすことはできなかった

「マグニチュード！」

続けてマグニチュードで攻撃した。マグニチュードは四だった

「コモルー！ ジャンプしてかわせ！ かわしたらかえんほうしやだ」

コモルーは重たいからだを空中に上げた。そして、マグニチュードをかわしかえんほうしやで攻撃をしかけてきた

「ダグトリオ！ あなをほるでかわすんだ」

ダグトリオはすばやくあなをほりその中に入りかえんほうしやをかわした

「ダグトリオ！ そのままあなをほる攻撃だ！」

あなをほるはコモルーに当たった。だが、そのぶつかり合ったのをよく見てみると、あなをほるが当たったのではなくコモルーのドラ

ゴンクローが当たっているのだ

「ダグトリオ！」

「そのまま！ すてみタツクルだ！ コモルー！」

ダグトリオはかわすひまもなくすてみタツクルを直接受けた

すてみタツクルを受けたダグトリオは戦闘不能になってしまった

「ダグトリオ戦闘不能！ コモルーの勝ち」

「戻るんだ。ダグトリオ」

ヒノアラシはそういいながらダグトリオをボールに戻し。フィールドから降りてきた

「おしかったな」

ワニノコがフィールドから降りてきたヒノアラシに声をかけた

「あいつは強いよ、ワニノコ。油断しないでね」

「わかってるよ。お前のためにも勝ってきてやるぜ」

そう言うとワニノコはフィールドを上がった。すると、ライチユウは審判に何か言っていた

「すみません。ここで特別ルールを使わさせてくれませんか？」

ライチュウはどうかやら決勝戦特別ルールを使うために審判にそれを言っているらしい

決勝戦特別ルールとは、決勝戦だけで使用が可能でクラスで一回のみ使用できる特権でそのルールを使用したらポケモンを変更できると言うもの

これを使うことによりライチュウはコモルーをボールに戻し新しいポケモンを出すことができるのである

「わかった。使うことを許可する」

「よし。戻るんだ！ コモルー」

ライチュウは許可がおりたと同時にコモルーを戻した

「ただいま、六年A組は決勝戦特別ルールを使用しました。そのため、コモルーはボールに戻されました」

審判がそう説明した。そして、ワニノコとライチュウはバトルするための定位置についた

「では試合開始！」

「行け！ ピジョット」

「行くだ！ ピカチュウ」

ワニノコはピジョット。ライチュウはピカチュウだった

相性的にはワニノコのほうが不利だった

「ピジョット！ つばめがえした」

「ピカチュウ！ 耐えるんだ！」

ピジョットのつばめがえしはピカチュウに当たったが、ピカチュウはたえた

「そのまま、十万ボルトだ！」

ピカチュウは接近してきていたピジョットに十万ボルトを放った

「こつそくいどうでかわすんだ！」

「ピカチュウ！ かみなりを放ち打て！」

十万ボルトはかわすことができたがかわした方向にかみなりが落ちてきたため、ピジョットは大ダメージを受けた

「ピジョット！ がんばれ！ はがねのつばさ！」

今度ははがねのつばさで攻撃をしたが、こつかはいまひとつのためあまり効いていないようだった

「十万ボルトだ！」

「オウムがえし！」

ピカチュウの十万ボルトが攻撃をするため接近していたピジョット

にむけて放たれた。ピジヨットはオウムがえしでなんとか十万ボルトから自分のみを守りピカチュウにダメージを与えた

「ピカチュウ！ 負けるな！十万ボルト」

「もう一発オウムがえしだ！」

また十万ボルトがピジヨットの元に飛んでいくが、オウムがえしで再度十万ボルトをはねかえした

「かみなりで十万ボルトを押し返せ！」

ピカチュウのかみなりがピジヨットのオウムがえしではじかれた十万ボルトとぶつかり合った。その瞬間、十万ボルトは消えてしまっただがかみなりが残った

そのかみなりはピジヨットを襲う！ その時ピジヨットはオウムがえしをできる体制ではない

「ピジヨット！ 高速いどうでかわせ！」

ピジヨットは間一髪でかみなりの直撃を防ぐことができた

この時、両者共に疲れの顔を見せ始めた

「（この勝負そろそろ終わりかな……）」

外で見ていたヒノアラシがそう思った

「ピジヨット！ でんこうせっか」

「ピカチュウ！ でんこうせつか」

2人とも同じわざを命令した。このでんこうせつかの威力が強いほうが、このバトルの分かれ目となる

「いけ！ ピジヨット！ そのままこうそくいどう！」

「ピカチュウ！ 負けるな！ こっちもこうそくいどうだ」

二匹ともすばやくなり、でんこうせつかに威力がプラスされる

そして二匹のわざがぶつかりあった。それは力と力の勝負になった

「がんばれ！ ピジヨット！」

「ピカチュウ！がんばれ！」

二人は声を出す。そして、最後に二匹は衝撃ではじき返された

「ピジヨット！」

「ピカチュウ！」

二人は二匹に声をかける。そして倒れている二匹のポケモンで先に立ち上がったのは、ピカチュウだった

「ピジヨット！」

「ピジヨット戦闘不能！ ピカチュウの勝ち」

ワニノコはピジヨットをよぶ。しかし、審判の判決が下り、ピジヨットは戦闘不能となり試合続行不可となった

「戻ってくれ、ピジヨット。ご苦労様」

ワニノコはピジヨットをそういいながらボールに戻した

そしてワニノコから後ろのクラスメイトがピカチュウと戦った。その次のクラスメイトは完全につかれきったピカチュウと戦ったため、あっさりと勝負をつけてしまった

こうしてこのままりレー戦が続き最後には、ワニノコたち五年A組が最終的に優勝となり、学校の栄冠を手にするのだった

決勝戦が終わった後。三位決定戦が行われた。そこでチコリータの五年B組が勝ったことにより、五年B組が三位となったのである

三位決定戦終了後。開会式はなかったが閉会式が行われるということで全クラスが朝礼台の前に整列した。すると、最初に朝礼台上がったのは校長だった

「まず、五年A組の諸君達。おめでとう。そして準優勝の六年A組の諸君達もよくがんばった。ここで上位三クラスまでの諸君達に話があります」

「なんだ？」

ワニノコはそう思いながらも話をきいた

「今度、国内学校別大会というものがあります。おそらく聞いたことあるかと思います。その試合にあなた方三クラスは参加をしていただきます」

「まじかよ！　すごい！」

ワニノコはとても喜んだ。国内学校別大会というのは国内で一番強い学校を決める大会だからである。それに、そこに参加する選手は全員つわものであるため、強いやつと戦うことができるのだ

「詳しい話は担任の先生から聞くように。以上だ」

こうしてこの日の大会は幕を閉じた。そしてワニノコたちは、国内学校別大会にむけるのだった……

第三話終了 第四話続く……

第03話 「新たなる戦い」(後書き)

今回でリメイク版は終了です。今回は読みきり小説「クラス対抗バトル大会」完結編」をリメイクしたものです。最初の部分は第二話に吸収されているため、その部分だけは書かれていません。次回から、国内学校別大会編となります。お楽しみに

第04話 「五人の枠」 (前書き)

クラス対抗バトル大会で優勝したワニノコたちの五年A組。閉会式で国内学校別大会に参加できることを知っていた

第04話 「五人の枠」

クラス対抗バトル大会が終わった次の日

クラス対抗バトル大会は金曜日に行われたため、この日は土曜日で休みだった

ワニノコはヒノアラシを誘い、いつも練習している町はずれの草原に向かい練習を始めた

「ピジョット！ つばめがえし」

「リザードン！ かえんほうしゃだ」

接近してくるピジョットに対しリザードンはかえんほうしゃを放った

「こっそくいどうでかわすんだ！」

かえんほうしゃはこっそくいどうでかわされてしまった

「リザードン！ はがねのつばさー！」

「ピジョット！ こっちもはがねのつばさだ！」

かえんほうしゃをかわしたピジョットは一気にリザードンむけて接近する。一方のリザードンもつばさをかたくしはがねのつばさで攻撃する体制に入った

「いまだ！ リザードン！」

ヒノアラシがそういうとリザードンは飛び上がり、ピジヨットにはがねのつばさをおみまいした。そのピジヨットもリザードンにはがねのつばさを当てた

「ピジヨット！ はかいこうせん！」

接近していたリザードンにピジヨットは至近距離ではかいこうせんを放った。威力は近いと倍になった

そのはかいこうせんにリザードンはかわすことができなかった。そして、リザードンは地上に落ち戦闘不能となった

「よっしゃー！」

「戻るんだ、リザードン」

ワニノコが喜んでる中でヒノアラシはリザードンをボールに戻した

「戻れ！ ピジヨット」

ヒノアラシがリザードンをボールに戻したのを見てワニノコもピジヨットをボールに戻した

そして、ワニノコがヒノアラシのほうに向かった

「あそこではかいこうせんが飛んでくるとは思わなかっただろ？」

「うん。あの体制から来るとは思わなかった。もう少し遅かったらブラストバーンを放ってただろうから、どうなってたかわからなか

ったのにな」

「多分、プラスチックバーンとはかいこうせんがぶつかりあったらピジヨットが危うかったと思う」

「そうかな？ リザードンのほつも危うかったと僕は思うよ」

「どっちもどっちってことかな？」

「そうかも」

「ところで、ヒノアラシ。昨日のことだけど」

「国内学校別大会のこと？」

「それぞれ。よくわかったな」

「ワニノコがいま一番興味のあるそうなのはこれしかないもん。で、それがどうかしたの？」

「いやさ、いつ行くんだろうな〜と思ってた」

「冬休みまでのばすんじゃないの？」

「冬休みまで！？ まってくれよ。こないだ夏休みが終わったばかりだぜ。まだまだ、先じゃんか……」

「でも、冬休みじゃないと行く機会はないよ。連休はあるけどその連休じゃ終わらないと思うし」

「いつ行くんだか……。いついかわからないと練習の調整ができないぜ」

「まあ、しょうがないよ。ぼちぼち、やろっ」

「仕方ない。そうするか」

こうしてワニノコたちは再度練習を始めるのだった

そして、二日後

普段どおりに学校へ行き授業を受けた。その日の終学活のときに先生から話しがあつた

「こないだの国内学校別大会は来週の今日から始まることになった」

「え！？ 来週の今日？」

「そうだ。そして、大会には学校から五名しか出場できないことになっているらしい。そのため、水曜日に一位から三位のクラスでトーナメント戦をすることとなった。そのための準備をしておけよ」

こうして、二日後の水曜日にクラス生徒別トーナメントが行われることになった

その日の放課後。ワニノコとヒノアラシはいつもの草原に行った。もちろん、練習をするためである

「まさか、来週だなんてね」

「ああ。驚きだよな。しかも、学校から五人しか出られないっていうのにも驚きだぜ」

「そうだね。五人だけなら僕たちのクラスから五人を選出すればいいのにな」

「校長も意外と頭が悪いのかもな」

「そうかも。あれ？ ワニノコ。あれチコリータじゃない？」

いつもの草原に向かいながら会話をしている途中。その草原のところにチコリータがいた

「おーい！ チコリータ！」

ヒノアラシが大きな声で言った。すると、チコリータはこっちを向いた

ワニノコとヒノアラシは走ってチコリータのところへ向かった

「こんなところでなにしてるんだ？」

「あなた達を待ってたのよ」

「僕たちを？」

「ええ。いつもあなた達はここで練習してるでしょ？ 私もその練習にまぜて欲しいのよ」

「そりゃいいけど、いったい急にどうしたんだ？」

「あなた達も聞いたでしょ？ 国内学校別大会の参加者数のこと」

「ああ。五人しかでれないって言うやつだな」

「そうよ。私はその五人の中に入りたいの。だから、練習をしてさらに強くなりたいのよ」

「だから、僕たちの練習に加わりたいんだね。でも、チコリータは今のままでも十分強いと思うよ」

「今のままじゃダメなの」

「なんでだよ？」

「五年A組。五年B組。六年A組から五人が選抜されるのよ。あなた達二人はトップクラスの实力を持っているわ。だから、五人のうち二人はほぼ決定よ。そして、残りの三人は、六年A組のライチュウとタツベイ。そして、五年A組のニューラが入る可能性が高いわ。すると、私は入る場所がなくなってしまうのよ」

「考えすぎじゃないか？ いくらなんでも俺たちが必ず入るとは限らないし、ニューラもそんなに強くないぜ」

「そうかしら……。ともかく、私も確実に入るためにもっと強くなりたいの」

「わかったよ。ワニノコ、ませてあげようよ」

「別にませたくないわけじゃないんだけど」

「じゃあ、決まりね。私もませさせてもらっわ」

こうして、この日はチコリータをませ練習を行った。次の日もその場所で三人で練習をするのだった……

そして、水曜日

五年A組。五年B組。六年A組は朝の学活終了後、校庭に全員集まった

そして、校長の挨拶が始まった

「では、これより国内学校別大会の参加者を決めるトーナメント戦を行う。各自、朝の学活で配布されたトーナメント表をよく見て、すべき行動を取ってください」

そう言うと、校長は朝礼台をおり教頭であるユンゲラーが諸注意などを説明してからバトルが始まるのだった

「ヒノアラシは何ブロックだった？」

「僕はAブロックだったよ。ワニノコは？」

「俺はEブロックだった」

「僕たちはあたらないな。お互いがんばろっぜ」

「うん。がんばろっ」

ブロック別にバトルフィールドが違っているのでワニノコとヒノアラシは
ここで別れた

こうして、クラス生徒別出場者決定トーナメントが開催されるのだ
った

第四話終了第五話続く・・・

第04話 「五人の枠」 (後書き)

さあ、この小説もリメイク版からオリジナルの展開に移りました。
クラス対抗バトル大会 国内学校別大会ではなく、クラス対抗バトル大会 クラス生徒別出場者決定トーナメント 国内学校別大会という展開になりました。今後の展開に注目です

第05話 「五人の代表者」(前書き)

国内学校別大会に五名しか行けないことを知ったワニノコたち。その中に入れるように練習を続け、ついにクラス生徒別出場者決定トーナメントが開催されるのだった

第05話 「五人の代表者」

ヒノアラシと別れたワニノコはEブロックの会場に向かった

会場は、AブロックとBブロックは体育館。C、D、Eブロックは校庭だったため、ヒノアラシは体育館へ。ワニノコは校庭にそのまま残るのだった

ワニノコがEブロックに向かっているときに、ワニノコに誰かが話しかけてきた

「おい！」

「なんだ？」

後ろから声が聞こえたため、ワニノコは後ろを振り向いた。するとそこにはタツベイがいた

「お前は五年A組のワニノコだな？」

「そうだけど」

「お前は何ブロックだ？」

「俺はEブロックだけど、君は誰？」

「わかった。おれは六年A組のタツベイだ」

「あ、おはようございます。ところで、タツベイさんは何ブロック

ですか？」

「おれはCブロックだ。ライチュウのやつはBブロック」

「そうですか」

「それじゃあな」

タツベイはそう言うところかに行こうとしたがワニノコはそれをとめた

「待ってください。どうして、俺がどのブロックかなんて聞くんですか？」

「ライチュウに頼まれたのさ。お前が何ブロックかを聞いてこいてな」

タツベイはそう言うと、C会場に向かって歩いていった

「ライチュウさん、なにを考えてるんだろう？」

ワニノコはそう不思議に思いながらもEブロック会場へ向かった

こうして、ワニノコたちのクラス生徒別出場者決定トーナメントが始まった

ワニノコは順調に勝ち進め、Eブロックの代表となった。

一方のヒノアラシもワニノコとの練習の成果やもともとあった力のおかげで、Aブロックの代表となったのである。

そんな中、校庭と体育館の中間に設置してあったトーナメント表に別のブロックの代表者の名前が書かれていく

それによると、Bブロック代表はライチュウ。Cブロック代表はタツベイということがわかった。だが、Dブロックだけ代表者名が書かれていなかった。

「なあどうしてDブロックだけかかれてないんだ？」

トーナメントを見ていたワニノコが隣にいるヒノアラシに聞いた。

「まだ、Dブロックは試合が終わってないんじゃない？ Dブロック会場に行ってみようか？」

「そうだな」

ワニノコとヒノアラシはそう話すとDブロック会場に向かった。

すると、そこでは白熱のバトルが繰り広げられていた。

「フシギバナ！ はっぱカッターよ！」

「ヤミカラス！ ふきとばしだ！」

フシギバナははっぱカッターを放ったが、ヤミカラスのふきとばしではっぱカッターは勢いを失い、ヤミカラスにダメージを与えることができなかった。

「チコリータとニューラが戦ってるのか」

その試合を見たワニノコはそう言った。

「そうみたいだね。しかも、二人とも結構疲れがあるみたいだ」

「ああ。そろそろ決着がつくだろうな」

チコリータとニューラ自身も疲れているような表情をしており、戦っているポケモンも疲れている表情を見せていた。

どうやら、長い時間、戦っているようだ。

「フシギバナ！ にほんばれよ！」

「ヤミカラス！ つばめがえしだ！」

フシギバナがにほんばれをしたとたん、ヤミカラスはつばめがえしをするために動き出した。

にほんばれをするには隙がある。その時間を狙ったのだ。

そして、そのつばめがえしはフシギバナに当たったのである。

「フシギバナ負けないで！ こうこうせいよ！」

つばめがえしを受け、大ダメージを受けたフシギバナはこうこうせいで体力を回復し始めた。

にほんばれの効果により、フシギバナはいつもより多く回復をした。

「ヤミカラス！ つばめがえしだ！」

回復をしているときに、ヤミカラスはつばめがえしをするためにフシギバナに向かっていく。

「フシギバナ！ つるのムチでヤミカラスをはらうのよ！」

「かわせヤミカラス！」

フシギバナはつるのムチをヤミカラスにあてようとしたが、ヤミカラスはそのつるのムチをかわした。

そして、つばめがえしはフシギバナに当たった。

「フシギバナ！ ソーラービーム！」

フシギバナに近づいていたヤミカラスにフシギバナは一気にソーラービームをあて、ヤミカラスに大ダメージを与えた。

「ヤミカラス！」

「どうよ！ にほんばれはこうこうせいのためだけじゃないんだから！」

チコリータは強がった発言をした。

だが、チコリータにも余裕はなかった。そして、また、ニューラにも余裕がなかった。

いや、どちらかといえばチコリータには多少の余裕はあるだろう。

ニューラのヤミカラスは自分で回復する術を持っていない。だが、フシギバナはこうこうせいという回復する術を持っているからだ。

「ならばこれで終わっちまえ！ ヤミカラス！ ドリルくちばしだ！」

ニューラはヤミカラスにドリルくちばしを指示した。

「フシギバナ！ くるわ！」

ヤミカラスはフシギバナに近づいていく。だが、チコリータは待ちの体制をとっていた。

そして、ヤミカラスがすぐとなった時。チコリータは指示を出した。

「フシギバナ！ ハードプラント！」

「なんだと！？ ヤミカラス！ 回避しろ！」

フシギバナは草タイプ最強のわざハードプラントを放った。フシギバナの正面にドリルくちばしを当てようとしていたヤミカラスは低空飛行だったため、ニューラは上空に回避させようとしたが、ハードプラントの速さでかわすことができなかった。

ハードプラントを受けたヤミカラスはふき飛ばされ、落ちたところで戦闘不能となっていた。

「やった！ 私の勝ちよ！」

「くっ。戻れ！ ヤミカラス！」

ニューラはヤミカラスをボールに戻すと、すぐに会場を後にした。

こうして、Dブロックの代表はチコリータに決定をした。

チコリータはワニノコたちを見つけると、ワニノコたちの所へやってきた。

「どうだった？ 私の試合」

「よかったんじゃないか。特訓の成果もあったみたいだし」

「そうだよ。近づいてきてからハードプラントをするなんて、いい作戦だし」

「ありがとう二人とも。あなたたちは代表にはなったの？」

「ああ。俺はEブロックの代表」

「僕はAブロックの代表だよ」

「で、私はDブロックの代表か。よかったね、三人とも代表になれて」

「ああ」

「おい」

ワニノコたちがそう話していると、後ろから誰かが話しかけてきた。

それを聞いたワニノコとヒノアラシは後ろを向いた。すると、そこにはライチュウとタツベイがいた。

「どうやら、君達がブロック代表者たちのようだね」

「やっぱり、お前達が代表になったか」

「あ、ライチュウさんとタツベイさん。先輩方も代表となったんですよね」

「ああ。ぼくはBブロック」

「おれはCブロックだ。まあ、こんな校内戦なんかじゃたいしたことはないけどな」

「それでなんのようですか？」

「いや、ただあいさつだけしようと思ってね。それだけだよ」

「じゃあ、ライチュウ。行こうぜ」

「ああ」

ライチュウたちはそう言ってワニノコたちの所から離れていった。

この後、閉会式が行われ、代表者の発表が行われた。

ワニノコ。ヒノアラシ。チコリータ。ライチュウ。タツベイは祝福を受け、国内学校別大会への参加権を手にするのだった。

第五話終了第六話に続く・・・

第05話 「五人の代表者」(後書き)

日数が空きましたが、第五話更新です。今回のメインはチコリータVSニユーラでした。さて、これから国内学校別大会への挑戦が始まります。

第06話 「国内学校別大会」(前書き)

クラス生徒別出場者決定トーナメントで、見事勝ち抜き、代表となったワニノコ。ヒノアラシ。チコリータ。

ライチュウとタツベイを加え、国内学校別大会への出場権を手に入れるのだった。

第06話 「国内学校別大会」

出場者が決定してから、三日がたった。

明後日から、国内学校別大会ということで、ワニノコは明日の準備をしていたのである。

国内学校別大会は、セントタウンから遠く南に行ったところで開催されるため、ワニノコたちは遠征の準備をしないとイケないのだ。

会場まではフェリーで行くことになっている。

そんな中。明日の準備が整ったワニノコは、いつもの町外れの草原に来ていた。

もちろん、練習をするためである。

「ふう。少し休憩するか」

長い間練習をしていたワニノコは草原にある岩に寄りかかり、休憩をした。

そんな時。草原に誰かがやってきた。

「やあ、ワニノコ」

「ライチュウさん」

そう。来たのは代表の一人であるライチュウだった。

「どづしたんですか？ こんなところに」

「この草原はぼくには思い入れがあるんだよ。その思いに浸ろうと思ってる。こいつのためにも」

ライチュウはそう言うと、ボールを取り出し、ピカチュウを出した。

「思い入れ？」

「そうさ。このピカチュウはここで怪我をしていてね。それをぼくが助けたんだ。それからピカチュウはぼくになついてね。それで捕まえたのさ」

「でも、草原にピカチュウがいるなんて珍しくないですか？」

「多分、森から逃げてきたんだろう。怪我は誰かに攻撃をされたんだろうからね。それで、ぼくとピカチュウが出会った場所に今日来たのさ」

「そうだったんですか」

「ところで、ワニノコはなんでこんな所にいるんだ？」

「俺はここでいつもバトルの練習をしてるので練習のために」

「そうだったのか。ワニノコの強さの秘密はこの草原か」

「はい。いつもここでヒノアラシと練習をしています」

「そうか。だが、ほどほどにしておけよ。あまり練習をせざるべし。明後日にも疲労が残ってしまうからな」

「はい」

「それじゃ。ぼくはもう少し奥に行くから」

「はい。さようなら」

次の日

ワニノコたちは、セントタウンにあるセント港に集合をした。

「よし。五人集まったな」

そう言ったのは、教頭であるユンゲラーだった。

「国内学校別大会には私がつく。私の指示に慕うように」

「はい」

「それでは出発だ」

こうして、ワニノコたちは船に乗り込んだ。

それから三十分後。ワニノコとヒノアラシとチコリータは船内を見て回っていた。

「もう、全部見ちゃったね」

ヒノアラシが言った。

「そうだな。そんなに大きな船じゃないからすぐに見回っちゃったな」

「そうね。これからどうする？」

「そうだな。特にすることないし、甲板に行くか」

「え！ 甲板に行くの？」

「なんだよ、ヒノアラシ。嫌なのかよ？」

「そ、そりゃ、海を目の前で見るのは恐くてしょうがないもん」

「ヒノアラシはほのおタイプだものね」

「大丈夫だって。もしもの時は俺が助けてやるからさ」

ワニノコはそう言い、ヒノアラシを無理やり甲板に連れて行った。

「わあ！ きれい！」

甲板に出たときの景色を見てチコリータはそう言った。

「そうだな。ヒノアラシも見ろよ。きれいだぜ」

「きれいでも怖いもん……」

「たく。相変わらず臆病だな」

ワニノコたちは甲板の奥に出て、その美しい景色を見ていた。

「あの。すみません」

「はい？」

景色を見ていたワニノコに誰かが話しかけてきた。後ろを振り返ってみると、そこにはキルリアがいた。

「あの、この辺にバクフーンを持つてるアチャモを見ませんでしたか？ 名前は焰っていうんですけど」

「バクフーンをつれたアチャモ？ いや、見てないですけど。チコリータは見た？」

「いいえ。見てないわ」

「そうですか。ありがとうございます」

そのキルリアはそう言って、その場を後にした。

「お！ こんな所にいたのか！ ミキ」

キルリアがその場を去った時。甲板に入ってきた一人のアチャモがキルリアにそう言った。

「どこ言ってたの焰？ 探してたのよ」

「じめん、ミキ。ちょっと、いろいろあってさ」

「もう。さあ、早く行くわよ」

「ああ」

そう言って、その二人はその場から去っていった。

それから数時間後。

フェリーは、国内学校別大会が行われる地”ワックシティ”にやってきた。

「すげえ！」

ワックシティの地に降り立ったワニノコは、街にある巨大ビルを見てそう言った。

「ワニノコ。感心していないで行くぞ」

それを見ていた、タツベイが言った。

「あ、はい」

こうして、ワニノコたちは港から街の中心部へとやってきた。

街の中心部は、人が大勢でとてもにぎわっていた。

シルフシティ以来のこの人の大勢さに驚かされたワニノコたちだった。

街を歩くこと数十分。ワニノコたちはホテルに入り、フロントで部屋割りがきめられた。

部屋割りは、五年生。つまり、ワニノコ。ヒノアラシ。チコリータで一部屋。六年生のライチュウとタツベイで一部屋という部屋わりになった。

ユンゲラーは後から来る校長と同じ部屋になるという。

荷物を持って、ワニノコたちは割り当てられた部屋に入った。

「ここか。結構、広いな」

「そうだね」

「でも、三人で入ると少し狭いかもね」

「気にすんなよ、チコリータ」

この日の夜。ライチュウとタツベイを含むワニノコたちはユンゲラーの部屋へと来ていた。そこには校長のフーデインの姿もあった。

「いよいよ明日だ。それに伴い、国内学校別大会のルールを教えよう」

「ルール？ 五対五じゃないんですか？」

フーデインの言葉を聞いたワニノコはそう聞き返した。

「そうだ。大会は三対三のチームバトル。二勝したほうが勝ちというルールだ。よって、一試合に付き、二人の欠員が出ることになる」

「じゃあ、その二人はホテルで待機ですか？」

チコリータが言った。

「いや。その二人も会場へ来てバトルを見てもらう。なにかあったときは、欠員のどちらかがアシストをすることになる。次に、勝ち負け後のルールを説明しよう。」

試合形式はトーナメント制だが、最初はリーグ戦で行われる。Aブロック。Bブロック。Cブロック。Dブロック。Eブロック。Fブロックの六ブロックに別れる。各ブロックの優勝者が、決勝トーナメントへとこまを進めることになる。これでわかったかな？」

「とりあえず最初はリーグ戦。リーグ戦で優勝したらトーナメント制ということぐらいはわかりました。な？ ライチユウ」

「うん」

「俺も大丈夫だ。二人も大丈夫だよな」

「ええ」

「うん」

「なら今日はここで終了としよう。これだけ知っていれば差し支えはない。リーグ表などは明日配布される」

「わかりました」

「それでは諸君は部屋に戻りたまえ」

こうして、国内学校別大会の簡単なルールを知ったワニノコたち。

いよいよ、国内学校別大会の幕が開けるのである。

第六話終了第七話に続く・・・

第07話 「開催！ 国内学校別大会！」（前書き）

国内学校別大会が開催されるワックシティにやってきたワニノコたち。ルールなどを聞き、大会に備えるのだった。

第07話 「開催！ 国内学校別大会！」

国内学校別大会当日の朝がやってきた。

開会式が、九時からあるということで、全員早くおきて朝食を取った。

朝食後は散歩をし、開会式が行われるワックススタジアムに向かうのだった。

ワックススタジアムに着いたワニノコたちは、入場ゲートの前で整列して待たされた。無論、これはワニノコたちだけではなくほかの学校の生徒もだった。

「すごい人だな」

入場ゲートにいた人たちの数を見て、ワニノコはそういった。

「そりゃそうだよ。なんたって、国内の学校からきてるんだから」

「一体何校あるんだろう？」

「どうやら、二百八十校みたいよ」

「二百八十校！？ そんなにあるのかよ……」

「大丈夫だ。リーグ戦に勝ち抜けば、一気に四十校まで減るからな」

「それもまた少ないですね……。二百四十校もリーグ戦敗退ですか」

……」

「ワニノコ。そんなに負けるような言い方はせず、前向きにいこう」

「そうですね。よし！ 決勝トーナメントに行くぞ！」

入場式が始まり、ワニノコたちも入場した。開会式は予定通りに行われ、開会式の間も予定通り流れた。

開会式終了後。ワニノコたちのセント学校は、第八ブロックだったため、第八ブロックの試合が行われる会場に移動した。

ブロックは全部で四十ブロックあり、一ブロックは七校で争うことになった。

ワニノコたちが第八ブロック会場につくと、ワニノコはリーグ表を持っているチコリータに聞いた。

「なあ、このブロックにはなんていう学校がいるんだ？」

「えっと、ルインズ学校。アクシビ学校。トライズ学校。ルビ学校。ライトス学校。ブレイジング学校よ」

「そのうちの一枚のブレイジング学校は前々回の国内学校別大会のベスト8入りを果たした学校だよ」

「ブレイジング学校って、ブレイジングシティの学校だよな。あそこは、道場があるから強いのかもな」

「ところで、おれたちの最初の相手は誰だ？」

「トライズ学校です」

「トライズ学校か。まあ、たいしたことはなさそうだな」

そして、ワニノコたちのセント学校とトライズ学校のバトルが始まった。

セント学校は、ワニノコ。ライチュウ。ヒノアラシというメンバーでトライズ学校戦に望んだ。

初戦のワニノコは、カメックスをうまく使い余裕で相手に勝利をした。二戦目のライチュウは、多少苦戦をしいられるも勝利することができた。

よって、この戦いはセント学校の勝利に決定した。

この後も、ルビ学校。ライトス学校。アクシビ学校。ルインズ学校へと勝利を収め、気づけば今のところ全勝しているという快挙だった。

だが、第八ブロックで一番強いといわれている、ブレイジング学校も今のところ全勝していた。

そして、全勝しているセント学校と全勝しているブレイジング学校の二校がリーグ最後の試合で戦うことになった。

「それではこれより第八ブロック最終試合のセント学校対ブレイジング学校のバトルを始めます。最初の選手は両者フィールドに上がってください」

審判のハツサムがそう言うと、セント学校の一番手である、タツベイとブレイジング学校の一番手のダーテングがフィールドに立った。

「がんばれよ！ タツベイ！」

「わかってるよ、ライチユウ」

「それでは試合開始！」

「行け！ サナギラス！」

「やっちまいな！ モンジャラ！」

タツベイは、サナギラス。相手のダーテングはモンジャラを出してきた。

「サナギラス！ のしかかりだ！」

サナギラスはモンジャラにのしかかった。

「しめつけるだ！ モンジャラ！」

のしかかったサナギラスだったが、相手のモンジャラにしめつけられ身動きが取れなくなってしまった。

「サナギラス！ かみくだくだ！」

「モンジャラ！ ねむりごなだ！」

サナギラスはモンジャラにかみくだくをした。だが、その途中でモンジャラのねむりごなにかかってしまい、サナギラスは眠ってしまった。かみくだくのダメージは少ししか与えることができなかつた。

「モンジャラ！ メガドレインだ！」

モンジャラはメガドレインでサナギラスに攻撃をした。こうかはばつぐんだ。しかも、いわ・じめんタイプのサナギラスにくさタイプのわざは四倍のダメージを与えた。

「サナギラス！」

「止めだ！ ソーラービーム！」

「サナギラス！ おきろ！ はかいこうせんだ！」

モンジャラはソーラービームをチャージし始めた。タツベイははかいこうせんを放つようにサナギラスに指示をするが、一行にサナギラスはおきない。

「ソーラービーム発射！」

そして、ついにモンジャラのソーラービームが発射された。そのときだった。サナギラスはおきはかいこうせんをモンジャラに発射した。

だが、それは遅すぎた。モンジャラのソーラービームが放たれサナギラスに当たった瞬間にはかいこうせんを放つたため、モンジャラ

には少量のはかいこうせんしか放たれることなく、あまりダメー
ジは与えられなかった。

ソーラービームを直接受けたサナギラスは戦闘不能となっ
てしまっ

「サナギラス戦闘不能！ モンジャラの勝ち」

「くっ。サナギラスもどれ！」

タツベイはサナギラスをボールに戻し、フィールドを降りた。

「運が悪かったな、タツベイ」

「ああ。まさか、相手がくさタイプになるとは思いも
しなかった」

「次の出場者はフィールドに上がってください」

「よし、次はヒノアラシだ。がんばれよ！」

「うん！」

ヒノアラシは声援を受け、フィールドに上がった。

一勝をブレイジング学校にとられてしまった、ワニノコ
たちにはこの勝負を落とすことはできない。そんなプレッ
シャーを抱えながらもヒノアラシはフィールドに立っ
た。

ブレイジング学校の二番手は、ニョロゾだった。

「それでは試合開始！」

「頼んだよ！ リザードン！」

「がんばってこいよ！ ヤンヤンマ！」

ヒノアラシはリザードン。相手のニョロゾはヤンヤンマを出してきた。

「ヤンヤンマ！ シグナルビームだ」

「リザードン！ かえんほうしゃ！」

ヤンヤンマのシグナルビームはリザードンに当たったが、こっかはいまひとつだったため、全然ダメージを与えることができなかった。

リザードンのかえんほうしゃは見事ヤンヤンマに当たり、大ダメージを与えた。

「ヤンヤンマ！ シャドーボールだ！」

「もう一回かえんほうしゃだ！」

今度のシャドーボールとかえんほうしゃはぶつかり合った。

だが、威力はかえんほうしゃの方が大きく、シャドーボールは消えてしまいかえんほうしゃがヤンヤンマを襲った。

このかえんほうしゃでヤンヤンマは倒れると思われたが、戦闘不能

にはならずまだ戦えるという気力をみせた。

「これで終わりだよ。リザードン！ ブラストバーンだ！」

リザードンは止めの一発としてブラストバーンを放った。

「ヤンヤンマ！ かげぶんしん！」

だが、そのブラストバーンはヤンヤンマのかげぶんしんと特性”かそく”で上がっていたすばやさによりかわされてしまった。

「なんだって！」

「君のリザードンは反動で動けない！ ヤンヤンマ！ きしかいせいだ！」

リザードンは反動で動くことができなくなってしまい、ヤンヤンマのきしかいせいを受けてしまった。体力が減っているヤンヤンマのこのわざはリザードンに大ダメージを与えた。

「リザードン！」

リザードンはこのわざで戦闘不能になるとニョロゾは思っていた。だが、リザードンはよろよろになってはいるが倒れはしなかった。

「なに！？ でも、このわざで終わりだ！ ヤンヤンマ！ でんこっせつかだ！」

「リザードン！ がんばるんだ！ ほのおのうず！」

「ヤンヤンマ！ かげぶんしんでかわせ！」

ヤンヤンマはほのおのうずをかわすためでんこうせっかをしながら、かげぶんしんをした。

だが、そのほのおのうずはヤンヤンマのところには飛んでこなかった。

ほのおのうずは、リザードン自身の周りにうずを作っていたのである。

ほのおのうずがリザードンを取り巻き、ぶつかってきたものにはほのおのうずのダメージを与えるというものだ。

「まずい！ ヤンヤンマ！ でんこうせっかは取り消しだ！」

「無駄だよ！ ヤンヤンマのすばやさででんこうせっかはとめられなくても、このうずに入ってくる運命なんだ！」

確かにヤンヤンマはでんこうせっかを取り消すことができた。だが、それはうずの目の前で、そのうずに当たらないようにかわすことはできなかったのだ。

こうして、ヤンヤンマはうずにあたり、戦闘不能になってしまったのである。

「ヤンヤンマ戦闘不能！ リザードンの勝ち！」

「やったね！ リザードン！」

こうして、第二戦はセント学校のワニノコたちが勝利を収めた。

一勝一敗で迎えた、第三戦。このバトルで第八ブロックの優勝者が決まるのである。

第七話終了第八話に続く・・・

第08話 「決勝と危険」 (前書き)

国内学校別大会が始まった。ワニノコたちセント学校たちは順調に勝ち進み、強敵ブレイジング学校と戦うことになった。

一戦目のタツベイは負け。二戦目のヒノアラシは勝ち、第三戦にゆだねられるのだった。

第08話 「決勝と危険」

第三戦。セント学校はワニノコがフィールドに立った。そして、相手は、サワムラーだった。

「それでは、これより試合を開始します。」

「ワニノコがんばってよ！」

「任せとけて！」

「それでは試合開始！」

「行け！ カメックス！」

「頼んだ！ バルキー！」

ワニノコはカメックス。相手のサワムラーはバルキーを出してきた。

「カメックス！ 先手必勝だ！ ハイドロポンプ！」

「バルキー！ かげぶんしん！」

カメックスは、ハイドロポンプを速攻で発射した。だが、バルキーはかげぶんしんでハイドロポンプをかわした。ぶんしんはまだ残っている。

「カメックス！ こうそくスピんとみずでっぼうだ！」

カメックスは、こうそくスピンをしながらみずでつぼうを発射した。すると、四方八方に水が飛び、ぶんしんしたバルキーにダメージを与えた。

「なかなかやるな！ バルキー！ マツハパンチだ！」

バルキーはマツハパンチで、カメックスに攻撃をした。

「そこからメガトンキックだ！」

「からにこもるで耐えるんだ！ カメックス！」

マツハパンチで接近していたバルキーはメガトンキックもしてきた。だが、カメックスはそれをからにこもるで耐えた。

「至近距離ならこつちも有利だ！ アイアンテール！」

カメックスはアイアンテールで攻撃した。だが、その攻撃したも
のには手ごたえというものがなかった。

「くっみがわりか」

「そうだ！ バルキー！ とびひざげりだ！」

みがわりはバルキーに戻り、カメックスにとびひざげりを当てた。

「カメックス！」

そのとびひざげりでカメックスは倒れてしまった。だが、まだ、

戦闘不能ではない。

「がんばるんだカメックス！」

「しぶといな。バルキー！ ビルドアップ！」

「チャンスだ！ ハイドロポンプだ！」

バルキーはビルドアップを始めたため、動きを止めた。その瞬間を狙いカメックスはハイドロポンプを発射した。

だが、ビルドアップが終わってからハイドロポンプはバルキーがいた場所を通りすぎたため、かわされてしまった。

「なんてバルキーなんだ！」

「バルキー！ こころのめだ！」

バルキーはカメックスをターゲットとした。

「カメックス！ れいとうビームだ！」

カメックスはれいとうビームを発射した。だが、バルキーはそれをジャンプしてかわした。

「止めだ！ とびひざげり！」

バルキーは空中からカメックスめがけて、とびひざげりをしてきた。こころのめを使っているため、それをかわすことはできない。

だからといって、からにこもるで耐えられるほどカメックスに体力は残っていない。

「カメックス！ バルキーを近づける！」

ワニノコはそう指示をした。そして、バルキーはカメックスを射程範囲に入れるときだった。

「ハイドロカノン！」

「なんだと！？ かわすんだ！」

バルキーのとびひざげりが当たるといふときにカメックスはハイドロカノンを発射した。

至近距離だったため、バルキーはハイドロカノンをかわすこともできなかった。

そして、バルキーは空中へと持っていかれ、地上に落ちたのだった。

「バルキー戦闘不能！ カメックスの勝ち。よって、勝者セント学校！」

「よっしゃー！」

こうして、ワニノコたちのセント学校はブレイジング学校破り、見事決勝トーナメントへとこまを進めるのだった。

次の日。この日は、他のブロックがすべての会場を使い行われるため、決勝トーナメントは開催されないのだ。

決勝トーナメントが開催されるのは明後日なので、決勝トーナメントへこまを進めた後の二日間は、自由な時間だった。

ワニノコとヒノアラシとチコリータはその休みを利用し、大都市ワックシティ内で買い物などをして楽しむのだった。

そんな大都市内を歩いている時。早くホテルに戻るため、裏道を通っていくことにし、裏道を通ってる時のことだった。

角を曲がったときに、一人のゲンガーと出会った。

「あ、すいません」

一番先頭にいたワニノコがそう言った。とはいっても、ぶつかっただけではない。

「ここから先は立ち入り禁止だ！ とつとつ、出て行け」

すると、そのゲンガーはそう言い出した。

「え？ でも、立ち入り禁止の札なんてないけど……」

「そんなもんがなくても立ち入り禁止は立ち入り禁止なんだよ！ とつとつ出てけ」

そこまでして言われたワニノコたちはしぶしぶと来た道を戻り、大通りへと戻った。

そして、大通りを歩いている時ワニノコが言った。

「さっきの奴怪しいな」

「え？ どうして？」

「いや、さっきゲンガーに背を向けたとき薄っすら聞こえたんだよ
『大会を爆……』ってな」

「大会を爆つてもしかして……」

「ちょっとワニノコ。ここでその話しはまずいよ。ホテルに戻って
からしよう」

ワニノコたちはホテルに戻りそのことについて話し合った。

「ねえ、さっきの話だけど」

最初にそう切り出したのは、チコリータだった。

「ああ。たぶん、大会を爆破って言ったんだと思う」

「爆破！？ そんなことをされたら大変だよ！」

「しっ！ ヒノアラシ！ 声が大きすぎる」

「あ、ご、ごめん。でも、どうするの？ もし、それが本当だとし
たら大変だよ？」

「このことは校長先生たちに言ったほうがいいかもね」

「やっぱりそうするか」

「なにか、他に案があったの？」

「いや、俺たちがそいつらを捕まえようと思っていただけ、さすがにそれは危険かな〜とか思ってたさ。

そりゃあ、父さんとの戦い（ワニノコ達の旅参照）よりかは危険じゃないと思うけど」

「とりあえず、このことは私が校長先生に言っておくわ」

チコリータはそう言い部屋を出て行った。

「でも、一体、どんな目的があるんだろう？ 爆破するなんてすごいことをするんだぜ？」

「うん……。理由もなしに爆破なんてしないよね」

「無事にこの大会は終わればいいんだけどな……」

こうして、この日は終わった。明日はいよいよ決勝トーナメントだ。

第八話終了第九話に続く……

第09話 「謎のゲンガー」 (前書き)

決勝トーナメントへと進出したワニノコたちのセント学校。だが、大会が危険なことになっていることを知るのだった。

第09話 「謎のゲンガー」

ついに、決勝トーナメントが開催された。

決勝トーナメントといえども、まだ、四十校も残っており、決勝とは思えない数だった。だが、この校数で、決勝トーナメントは開催された。

ワニノコたちのセント学校は、予選リーグで戦った会場で決勝トーナメントが行われた。

決勝トーナメントは、残りの校数が十六校となった時、開会式を行った会場でバトルをすることとなっていた。

そのため、まだ、予選会場で決勝トーナメントを行うのだ。

セント学校は、決勝トーナメントをゆうゆうと勝ち抜いていった。

それもそのはず、セント学校は、名高いブレイジング学校を倒したため、それほど強い学校とは当たらなかったのだ。

そして、そうしているうちに、ベスト十六が決定したのだ。

「あんまり強くないな……」

ベスト十六入りを果たしたワニノコは言った。

「仕方ないだろ。おれたちは強い学校として見られ、相手が弱いところに入ったんだからな」

「逆に言えば優勝するには有利ということだけだね」

「でも、先輩方としてはあまり面白くないんじゃないですか？」

「いや、ぼくは、優勝することができたらいいと思っている。相手の強弱は気にしていないよ」

「おれもライチュウとほぼ同じ考えだが、やはり、強弱は少しづら
いあるといいとは思っている」

「先輩方にとっては最後だから優勝できればいいってことか」

「そついうことだな」

「ところで今日はもう終わりだな。これから、どつする？」

「どつするってどついうことですか？」

「いや、練習するかしないかってことさ」

「俺たちはいろいろと用事があるのでいいです」

「え？ 用事って何さワニ？」

「気にすんなって」

「？」

「じゃあ、おれたちは、近くの練習場で練習してるから気が向いた

らじいよ

「はい」

ワニノコたちはホテルに戻り、ライチュウたちは会場近くにある練習場へと向かった。

ホテルに戻ってきたワニノコたちは自分達の部屋に入り、最初にワニノコが口を開いた。

「さあ、調べるとするか」

「ねえ、一体何を調べるの？ それに用って何？」

「ヒノアラシは相変わらず鈍いわね。用って言うのと調査って言うのは昨日のことよ」

「もしかして、爆破するってやつのこと？」

「そうそう。俺たちの手で何とかしてみないか？」

「でも、爆破って言ったら危険だし……。それに、校長先生に言うたから何らかの処置を取ってくれているはずだよ」

「そりゃあ、取ってるだろうけど、ゲンガーたってたくさんいるんだからわからないだろ」

「そうだけど……」

「大丈夫だって。ヒノアラシ」

「やっぱり、僕はいいよ。恐いし……」

「ワニノコ。ヒノアラシは置いていきましょう」

「でも、ヒノアラシがいたほうが……」

「嫌がつてるんだからしょうがないじゃない。さあ、行きましょう」

ワニノコちチコリータは、ヒノアラシをホテルにおいて、昨日ゲンガーと出会った場所へと向かった。

そこに入るのは慎重に進み、様子を見ながら奥へと進んでいった。

「あれ？」

だが、奥には何もなかった。どうやら、すでに引き上げてしまったようだ。

「こりゃ、ダメだ。もう、逃げたらしい」

「そうみたいね。戻りましょうか」

チコリータがそう言い、来た道に戻ろうとすると、突然ゲンガーが現れた。

「きゃー！」

チコリータはそれに驚き、ワニノコに飛びついた。

「お、おい、チコリータ！」

「え？ あ、ごめんなさい」

チコリータはワニノコに飛びついたことを意識していなかったらしく、ワニノコが声をかけてから自分がしていることを認知して、ワニノコから離れた。

「ケケケ。お前らは昨日の奴らだな。もつとも、ヒノアラシがいな
いみたいけどな。一体なんのようだ？」

「お前らをとつ捕まえるために来たんだよ」

「ケケケ。俺たちの目的を知ってるのか？」

「ええ。国内学校別大会を爆破し中止させようとしているんですよ。
そんなことはさせないわ！」

「ケケケ。そうさ。あんな大会なくなっちまえばいいんだよ
！」

「なんだと！」

「あんないまいましい大会なんて開催している意味がない！ なく
なっちまえばいいのさ！」

ゲンガーはそう力強く言うと、その場から消えてしまった。

「くっ。やっぱり、爆破するきか」

「どつするのワニノコ？ あいつを止めないと大会はめちやくちやになるわよ」

「わかってる。だけど、あいつがどこに行ったかがわからないとどつしようもないし……」

ワニノコがそう言ったときだった。突然、ワニノコたちの周りに白い煙が立ちこんできたのだ。

「な、なんだ!？」

「これは……ねむり……ご……な」

「チコリータ……」

周りの白い煙を吸い込んだ二人はその場で倒れてしまった。

そう、これはチコリータの言ったとおりねむりごなだったのだ。

二人が倒れ眠ってしまったのを見るとゲンガーが現れた。

「ケケケ。眠った眠った」

それからどれくらいがたったのだらう。ワニノコがゆっくりと目を明けた。

「ふわあ」

ワニノコはあくびをしながらおきた。すると、そこは見慣れぬ場所だった。

あたりはコンクリートで覆われ、目の前には柵がある。高いところにある小さな穴からオレンジ色の太陽の光が差し込んでくる。

「ここは牢屋？ でも、どうしてこんな所に……」

ワニノコがそうつぶやくと、横に倒れているチコリータを発見した。

チコリータを発見したワニノコはチコリータをゆすった。すると、ゆっくりと目を覚ました。

「ここは？」

チコリータはそう言いながら起き上がった。

「わかんない。でも、どうやら閉じ込められたみたいだ」

「閉じ込められた？ あ！ 本当だ！」

チコリータは柵を見て、ワニノコの言ったことを理解した。

「でも、どうして閉じ込められたんだろう……？」

「たぶん、ゲンガールの仕業だ。俺の記憶だと、ゲンガーが消えてからそれから数分後までの記憶しかない」

「私も。こんなところに閉じ込めていたいどうしよって言うのかしら？」

「それより、ここを出る方法を考えよう。そろそろ日が沈んでしま
う」

「そうね。はっぱカッター！」

チコリータは柵に向かってはっぱカッターを放った。だが、柵は
びくともしない。

「やっぱり無理ね……。私の力じゃ……」

「フシギバナでやってみたらどうだ？」

「それができないの。今日の戦いでフシギバナを使ったでしょ？
それで、結構体力が消耗しちゃっていたから、今日は置いてきちや
ったの」

「そうなのか……。じゃあ、エアームドはいるのか？」

「一応いるわ。出てきて！ エアームド！」

チコリータはエアームドを出した。

「お願いエアームド。あの柵をあなたのわざで壊すの。はがねのつ
ばねー」

エアームドは柵に向かってはがねのつばさをした。だが、スピー
ドが加わらない部屋の中ではあまり威力は出なかったため、柵は壊
れなかった。

「やっぱり無理ね……。戻って！ エアームド」

「どうするか。柵は壊れそうもないぞ」

「そうね……。ワニノコの持っているピジヨットとカメックスでもさすがにこれを壊すことはできないでしょうね」

「となると、後はあの小さな穴を広げて、外へ出るしかないな」

「そうね」

「よし！ 出て来い！ カメックス！ ピジヨット！」

ワニノコはカメックスとピジヨットを出した。

「頼んだぜ！ ダブルはかいこうせんだ！」

ワニノコの二匹の手持ちは、小さな穴をめがけてはかいこうせんを放った。

すると、大きな音と大きながれきが落ちてきた。だが、大きな穴ができた。

「よっしゃ！ 戻れ！ 二匹とも」

「じゃあ、行きましょう。エアームド！ お願い！」

チコリータは再度エアームドを出し、二人でエアームドに乗った。

「よし。これで、逃げられたな」

「でも、一体どうして閉じ込められたのかしら？」

「さあ？ とりあえず、ホテルに戻ろう。向こうに会場が見えるからあそこがワックシテイだろうからな」

こうして、ワニノコたちは謎の牢屋から脱出した。

一体、ワニノコたちが閉じ込められた意味がわからぬまま。そして、誰が閉じ込めたかがわからぬままホテルへと戻るのである。

第九話終了第十話に続く・・・

第10話 「ベスト十六初試合 - 前編 -」（前書き）

ベスト十六を決定したワニノコたちのセント学校。その後、爆破するという声が聞こえた場所へ行くとゲンガーにつかまり、謎の牢屋内に入れられた。

だが、ワニノコの二匹の手持ちにより、その場から脱出し、ホテルへと戻るのだった。

第10話 「ベスト十六初試合 - 前編 -」

「え!?! 閉じ込められた!?!」

ワニノコとチコリータがホテルの部屋に戻り、ヒノアラシに事情を説明すると、そう言った。

「ああ。一体、どんな目的で牢屋に入れられたのかはわからないけどな」

「まあ、おそらく爆破に関する事で閉じ込められたんでしょうけどな」

「怖いね……。ねえ、まだ、それに関する事は調べるつもりでいるの?」

「私はもうパスするわ。そろそろ危険になってきてるし」

「俺は最後の最後までやりとおす。絶対に暴いてやろうと思ってる」

「ワニノコはなんでそんなに怖いもの知らずなの? お父さんの戦いにむけていった時もむちゃばかりしてるし」

「俺は自分の手で何とかしたいんだよ」

「負けず嫌いってことね。とりあえず、私は校長先生のところに行ってくるわ。このことに関してね」

次の日。ワニノコたちは開会式が行われた会場に向かった。決勝

トーナメントは、開会式が行われた大きい会場で行われるのだ。

だが、一つしかフィールドがないため、二日にかけてベスト十六決勝トーナメントを行う。

この日、セント学校は、午前の部二試合目だったため、朝九時ごろに会場へと向かった。

「なあ、今日の相手は誰だ？」

会場の待合室でワニノコは聞いた。

「今日の相手は、電翼学校よ」

「電翼学校？　すごい名前の学校だな……」

「そうね。あら？　校長先生が来たわ」

待合室にいなかった校長が待合室に入ってきた。手には何か書類を持っている。

「ちょっと聞いてくれ。ベスト十六となったこの決勝トーナメントでは、ルールが変更になった」

「ルールの変更？」

「そうだ。もともと、ベスト十六まで来たら決勝ルールに変わるのだ。今からルールを説明するからよく聞くように。」

各学校出場者は二名。出場者は二匹のポケモンを所持していること。バトルは、二対二のダブルバトルを二回行い、二勝した学校

の勝ち。引き分けになってしまった場合は、勝者同士がシングルバトルで戦い、勝利した学校が勝利となる」

「つまり出場者は三人から二人に。試合形式はシングルバトルからダブルバトルになるということですね？」

校長が話しを止めたとき、ライチユウがそう聞いた。

「そう言うことだ。そして、その試合で引き分けになってしまった場合、勝利したものが第三戦を戦い、勝ったほうが進出すると言うことになる。他に質問はないか？ それじゃあ、健闘を祈っている」

校長はそう言う待合室を出て行った。すると、タツベイが言った。

「では、どうするか。今回のバトルで出場する奴は」

「そうだな、タツベイ。君たちは誰か出たい人はいるかい？」

「俺はパスします」

「僕は出たいです」

「私も出たいわ」

「タツベイはどうだ？」

「おれも出られるなら出たいな」

「そうか。じゃあ、ヒノアラシとチコリータが出るといい」

「わかった。でもライチユウいいのか？ お前も出なくても？」

「ああ、ぼくはいいよ。じゃあ決定だな。頼んだぞ、二人とも」

「はい」

出場選手が決まったヒノアラシとチコリータに決まった時、大会のスタッフが来た。

前の試合が終わったので、フィールドサイドまで来てくれとのことだった。

フィールドサイドに付くと、そこは大勢の人がいた。

「わあ！　すごい人だ！」

それを見たヒノアラシは言った。

「そりゃそうさ。ベスト十六という強豪が集まってるんだからな」

それから、数分後。場内アナウンスにより、二つの学校はフィールド上であいさつを行った。

そして、そこに出場選手である、チコリータと相手の学校の出場選手である、リザードンがいた。

「オレはユナイ。よろしくな」

「こちらこそ、よろしくね」

二人はフィールド上でそうあいさつを交わした。

「それではこれより、セント学校対電翼学校による第一試合を開始します。両者ともいいですね。それでは試合開始！」

「頼むわよ！ フシギバナとエアームド！」

「頼んだぜ！ ボーマンダとピジョット！」

チコリータはフシギバナとエアームド。ユナイはボーマンダとピジョットを出した。

「エアームド！ スピードスター！ フシギバナ！ はっぱカッター！」

「ボーマンダ！ かえんほうしゃだ！」

ボーマンダはフシギバナのはっぱカッターを燃やした。だが、スピードスターには二匹とも当たってしまった。

「ボーマンダ！ かえんほうしゃ！ ピジョット！ つばめがえし！」

「エアームド！ かわしてスピードスター！ フシギバナ！ やどりぎのタネ！」

ボーマンダはエアームドに対してかえんほうしゃを放った。だが、エアームドはそれをかわしスピードスターを放った。

一方のピジョットはフシギバナにつばめがえしをくらわせた。だが、やどりぎのタネをピジョットに植えた。

「ボーマンダ！ ドラゴンクロー！ ピジョット！ フェザーダンス！」

ボーマンダはフシギバナにドラゴンクローで攻撃した。

ピジョットのフェザーダンスはエアームドにあたり、こっげき力が下がってしまった。

その時、ピジョットのやどりぎのタネが、フシギバナに力を少し与えた。

「ボーマンダ！ もう一発フシギバナにドラゴンクローだ！」

「フシギバナ！ どくどくよー！」

ボーマンダはドラゴンクローのためにフシギバナに接近した。その時、フシギバナのどくどくにより、もうどく状態にボーマンダはなってしまうた。

「ボーマンダ！ だいもんじだ！」

そのどくどくを受けたとたん、ボーマンダはだいもんじを放った。くさタイプのフシギバナにはこうかはばつぐんだ。しかも、至近距離なため大ダメージをおった。

フシギバナはその攻撃に対し、なんとか持ちこたえた。だが、ほとんど体力は残っていない。

だが、やどりぎのタネにより、少しだけ回復をした。

「フシギバナ！ こうこうせいよ。エアームド！ はがねのつばさ！」

「ボーマンダ！ かえんほうしゃだ！ ピジヨットはかげぶんしんでかわせ！」

ボーマンダはフシギバナがこうこうせいをしているときにかえんほうしゃを放った。

屋内であるため、太陽の光はなくあまり回復していないときにかえんほうしゃが当たったため、フシギバナは力尽きてしまった。

一方のエアームドは、はがねのつばさでピジヨットを攻撃しようとしたが、かげぶんしんでかわされてしまった。

「ピジヨット！ はかいこうせんだ！」

ぶんしんをしているピジヨットがはかいこうせんを放とうとしている。

それに対し、エアームドは困惑をしている。

「エアームド！ あなたもかげぶんしんよ！ 戻ってフシギバナ！」

エアームドはかげぶんしんをはじめ、ピジヨットに対抗した。その間にフシギバナの回収をチコリータはした。

「ピジョット！ はかいこうせん中止。つばさでうつだ！ ボーマンダはかえんほうしゃ！」

ピジョットははかいこうせんを中止しぶんしんにつばさでうつを繰り返した。そして、ボーマンダもかえんほうしゃでぶんしんを攻撃した。

「エアームド！ こうそくいどうでかわすのよ！」

二匹の攻撃によりぶんしんがなくなってきたとき、かげぶんしんを解いてこうそくいどうで二匹のわざをかわした。

「厄介だな。二匹とも！ つばめがえしだ！」

ボーマンダとピジョットはつばめがえしでエアームドを攻撃することにした。

速度がすばやいエアームドに通常の攻撃では当たらないと計算を踏んだのだ。

だが、その作戦はよかったが、はがねタイプのエアームドに対してはあまりダメージを与えることはできなかった。

「エアームド！ どくどくよ！」

つばめがえしのために近づいてきたピジョットに対しどくどくをして、ピジョットをもうどく状態にした。

「ボーマンダ！ かえんほうしゃ！ ピジョット！ はかいこうせん！」

「エアームド！ かげぶんしん！」

だが、その接近はエアームドに対してだけ有利ではなくほかの二匹にも有利だった。

ボーマンダは一気にかえんほうしゃを放ち、ピジョットははかいこうせんを放ったのである。

だが、エアームドは急いでかげぶんしんを行い、その二つのわざをかわした。

「エアームド！ そのままこうそくいどうよ！」

かげぶんしん中にエアームドはこうそくいどうをし、さらにかげを増やした。

「ボーマンダ！ かえんほうしゃだ……！」

ユナイはボーマンダにかえんほうしゃの指示を出した。だが、ボーマンダは空中から急降下してきたではないか。

そして、大きな音と共に、ボーマンダは戦闘不能になってしまった。

「戻れ！ ボーマンダ！ くそ、どくどくのせいか」

「そうよ！ エアームド！ ピジョットに止めのはがねのつばさ！」

「まずい！ ピジョット！ ふきとばしだ！」

ボーマンダが倒れ、エアームドははがねのつばさで、はかいこう
せんの反動により動けないピジヨットに向かっていった。

ユナイはピジヨットに対し、ふきとばしでエアームドを追い払おう
としたが、反動が続いており、はがねのつばさをかわすことができ
なかった。

そして、はがねのつばさを受けた、ピジヨットはボーマンダと同
じく下に落ちていったのだった。

「ピジヨット戦闘不能！ よって、第一戦の勝者はセント学校！」

審判がそう言った。

「やったあ！」

チコリータがそれを聞きよろこびの声をあげた。

こうして、セント学校は一勝を上げるのだった。

第十話終了第十一話に続く・・・

第11話 「ベスト十六初試合 - 後編 -」 (前書き)

ベスト十六に入ってから初の試合の初戦。チコリータはフシギバナを最初にやられてしまうが、エアームドの逃げ切りによりなんとか勝利することができた。

第11話 「ベスト十六初試合 - 後編 -」

「それではこれより、第二試合を開始します」

第一戦の出場者がフィールドから降り、第二戦の出場者がフィールドに上がった時審判がそういった。

第二戦目の出場者は、セント学校はヒノアラシ。相手の電翼学校は、ライチュウだった

「俺は、真架っていうんだ。よろしく」

「僕はヒノアラシ。よろしく」

そう二人はあいさつを交わした。

そして、二人は立場へと戻り、バトルの準備に入った。

「それでは試合を開始します。試合開始！」

「がんばってよ！ リザードンとダグトリオ！」

「行け！ ライとライチ！」

ヒノアラシはリザードンとダグトリオ。真架は、ライという名前のライチュウとライチという名前のライチュウを出してきた。

「リザードン！ かえんほうしゃ！ ダグトリオ！ じしん！」

「ライ！ フラッシュ！ ライチ！ スピードスター！ ジャンプしながらだ！」

リザードンはかえんほうしゃを放った。しかし、ライによるフラッシュで目がふさがれてしまったため、思わぬ方向にかえんほうしゃは飛んでいってしまい、結局当たらなかった。

ダグトリオのじしんは、ライとライチのしっぽを使ったジャンプにより、かわされてしまい、その空中にいるときに、ライチはスピードスターを放ってきた。

「じしんが当たらないならヘッドロばくだんだ！ リザードンはもう一度かえんほうしゃ！」

「ライはでんこうせっか！ ライチは十万ボルトだ！」

ダグトリオのヘッドロばくだんは、ライに飛んでいったが、でんこうせっかによりかわされた。そして、でんこうせっかはダグトリオに当たった。だが、あまりきいていなかった。

リザードンのかえんほうしゃは、十万ボルトとぶつかり合い、爆風が起こった。そのため、あたりは黒い煙で覆われた。

「（あのライチュウのでんこうせっか……。あんまりきかなかったみたいだ。どうやら、レベルがそれほど高くないみたい……）」

ヒノアラシはその黒い煙が待っている中でそう考えていた。その黒い煙が晴れると、ヒノアラシは衝撃の光景を目にした。

「リザードン!?!」

そう。煙が晴れるとそこにはリザードンの倒れている姿があった。でんげきでビリビリしている。

「どうだい？ ライのでんきショックは？」

「でんきショックだって？ でも、それじゃあ、こんなにダメージは……」

「でんきショックだからってあまく見ちゃダメだ。ちりも積もれば山となるのち」

「くっ、リザードン戻って」

「さあ行くぞ！ ライはでんこうせっか！ ライチはスピードスターだ！」

「ダグトリオ！ あなをほるでかわすんだ！」

真架の手持ちである二匹は、一気にダグトリオに攻撃をしてきた。だが、ダグトリオはあなをほり二つのわざをかわした。

「ライ！ 中に入ってたあたりだ！」

だが、でんこうせっかであなの近くに來ていたライはそのあなの中に入った。そして、たいあたりをした。

「無駄さ！ ダグトリオ！ ライチユウをあなから出してあげるんだ！」

ヒノアラシがそう大声で言うと、ライがあなたから思いっきり出てきた。

そして、地上にたたきつけられると、戦闘不能になっていた。

「なんだって!? 一体なにが……」

「あなをほるでほったあなたに相手が入るのは予想ができるんだよ。ダグトリオにその場合の訓練はしてあるんだ」

「戻れ! ライ!」

真架はライを戻しながらヒノアラシの話を聞き続けた。

「あなの中は狭い。そして、逃げ場がないんだ。まずきりさくで攻撃をして、僕の指示後にははかいこうせんで敵をあなたから追い出すのさ」

「なかなか考えているね。でも、俺は負けないぜ! ライチ! スピードスターだ!」

ライチはあなたに近づき、そこからスピードスターを放った。

「ダグトリオ! あなたから脱出だ!」

ダグトリオは横にあなをほり、スピードスターをかわし、別のあなから上空へと出てきた。

「じしんだ! ダグトリオ!」

「ライチ！ ひかりのかべを下にひくんだ！」

ライチはひかりのかべを横にして出した。そして、その上にライチは乗りじしんをかわした。

「スピードスター！」

「ダグトリオ！ あなをほるでかわすんだ！」

ライチのスピードスターが当たる前にダグトリオはあなをほりスピードスターをかわした。

「くっ。空中にいられちゃ、ダグトリオはほとんど攻撃ができない……。かといって、あなの中はずっといるわけにはいかないし……」

「ライチ。そこでじっとダグトリオが出てくるのを待つんだ」

それから数分間。何の変化もなく試合が過ぎていった。

「変だな」

その数分間の間に、ライチユウは言った。

「なにがですか？ 先輩？」

「いや、ぼくもライチユウだからわかるんだけど、あなの中に入って、でんこうせつとかメガトンパンチとかすればいいのにそれをしていないということが変なのさ。このチャンスを生かさないと手はないのね」

「そう言われてみれば確かに」

「威力よ」

ワニノコとライチユウがそう話しているとチコリータが言った。

「あのライチとかいうライチユウのわざは、普通のわざより威力が大きいように見えるわ。本来、私たちが覚えられるわざは四つまで四つまでがわざの威力を最大限に引き出せる数とされているからそう考えられているわ。でも、四つではなにかと不十分。だから、私たちは五個や六個とわざを覚えさせているけど、本来のわざの威力は見込めないの」

「つまり、あのライチユウは、わざを四つしか覚えていないということか」

「そう言うことになります。今のところ、十万ボルト。ひかりのかげ。スピードスターを覚えてることがわかっています」

チコリータがそう説明した時、ヒノアラシのダグトリオが地上へと戻ってきて、試合が再開された。

「ヘドロばくだんだ！」

「十万ボルトでヘドロばくだんを弾き飛ばせ！」

ライチは十万ボルトをヘドロばくだんに向けて発射した。そして、真架の予定通り、ヘドロばくだんは勢いを失い十万ボルトとぶつかった場所で落ちた。

「トライアタック！」

その時。ダグトリオのトライアタックがひかりのかべにぶつかった。すると、ひかりのかべはきえてしまった。

「なに！？」

「今だ！ じしん！」

「ライチ！ かわすんだ！」

真架のその指示は無駄に終わった。ひかりのかべが急に消えてしまったことで、予想もしていない形で地上に戻ってしまった。

地上に降りたとき、じしんの予兆で少しゆれていたため、少量ながらもダメージを受けている中での急な回避はできなかったのだ。

そして、ライチは体力が付き、戦闘不能となってしまった。

「ライチュウ戦闘不能！ よって、セント学校の勝ち！」

「やったあ！」

こうして、ベスト十六の初試合はセント学校の二連勝で、この日の試合は終わった。

この試合を勝ち抜いたことで、セント学校はベスト八となったのである。

「まさかここまで来るとは思いもしなかったよ」

その日の夜のホテルで、ヒノアラシはそう言った。

「俺もだよ。まさか、ベスト八になるなんてな」

「ここまで来たからには絶対優勝しようね」

「ああ。ところで、明日の相手はどこなんだ？」

「えっと、明日はダースト学校ね」

チコリータはワニノコにそう言い返した。

「ダースト学校？　なんか、黒いイメージがあるんだけど……」

「私もなんとなく……。まあ、イメージだからそれが本当になるとは限らないけどね」

こうして、この日は終わった。明日は、ベスト四をかけた試合に臨む……。

第十一話終了第十二話に続く……

第12話 「恐怖のゴースト集団」(前書き)

ベスト八入りを果たしたワニノコたちのセント学校。次の対戦相手はダースト学校という名の学校であった。

第12話 「恐怖のゴースト集団」

ベスト四入りのための試合がある日の朝のホテルでセント学校の関係者は校長の部屋へと来ていた。

「今日の出場者だが……」

全員が校長の部屋に集まると、校長のフーディンはそう話しを切り出した。

「今日は、六年生の二人に出場してもらいたいと思う」

「何故ですか？」

ワニノコがそう聞いた。

「ヒノアラシ君とチコリータ君は昨日戦った。だから、今日の出場者は、ワニノコ君。ライチュウ君。タツベイ君となるわけだ。言っているのは悪いが、私はこの試合が最後になると思っている。だから、この試合に六年であるこの二人を出場させたいのだ」

「この試合が最後になるって……」

「ダースト学校というのは、昨年、二位になった学校だ。要するに相当の実力者たちが集う学校なんだ」

そう説明したのはタツベイだった。

「そうだったのか……。じゃあ、今日の試合は先輩方がんばって

「いただかないと」

「うん。がんばるよ。な、タツベイ」

「ああ」

「よし、決まりだ。ヒノアラシ君とチコリータ君に異論はあるか？」

「ありません」

「僕も」

「よし。では、ライチュウ君とタツベイ君はがんばってくれたまえ」

「ワニノコたちは、昨日と同じ会場へとやってきた。そこには昨日と同じくらいの観客がいた。」

「両学校はフィールド上へ上がってください」

「審判がそう言ったため、ワニノコたちはフィールド上へと上がった。」

「そして、相手のダースト学校の選手達も上がってきた。」

「ケケケ、お前達も代表者だったのか」

「お前はあのときの！」

「ケケケ、そうさ。俺がお前達を閉じ込めたゲンガー様だぜ」

「何を話しているんですか。あいさつをしますよ」

ワニノコとゲンガーが話していると審判があいさつをするように言った。

ワニノコたちはあいさつをし、フィールドから出場者以外は降りていった。

「あいつは本当に爆破する気なのかしら？」

フィールドを降りてから、チコリータがそうつぶやいた。

「ああ、絶対する。奴自身がそう言っていたんだからな。こうなれば、奴ら何かをする時になったら阻止してやるぜ」

「ええそれがいいわね」

一方、フィールド上には、セント学校の一番手であるタツベイが立っていた。

相手のダースト学校の一番手は、ジュペッタだった。

「それではこれより、試合を始めます。両者とも準備はいいですね。それでは試合開始！」

「行け！ ハクリユウとサナギラス！」

「行ってきなよ！ カゲボウズとヨマワル！」

タツベイは、ハクリユウとサナギラス。ジュペッタはカゲボウズ

とヨマワルを出してきた。

「ハクリユウ！ れいとうビーム！ サナギラス！ かみくだくだよ！」

「カゲボウズ！ シャドーボールだよ！」

ハクリユウとサナギラスのわざはヨマワルに当たった。かみくだくはこうかはばつぐんだったため、ヨマワルは大ダメージを受けた。

カゲボウズは、ヨマワルにかみついていたサナギラスに向けて発射され、サナギラスはダメージを受けた。

「へん！ それだけかよ！ サナギラス！ もういつペンやってやれ！ ハクリユウはカゲボウズに十万ボルトだ！」

サナギラスは再度ヨマワルにかみついた。その攻撃によりヨマワルは戦闘不能になると予想されていた。だが、その予想は覆させられた。ヨマワルは、きあいのはちまきを持っていたのだ。

一方のハクリユウの十万ボルトは普通にカゲボウズに当たった。

「たいしたことないな。そのヨマワルのきあいのはちまきには驚かされたけどな」

「あたいをなめてもらっちゃあ困るよ！ ヨマワル！ いたみわけだよ！ カゲボウズはサイコキネシスでもおみまいしてやりな！」

ヨマワルは、その弱った体力でサナギラスにいたみわけをした。これにより、サナギラスのダメージは半分まで減り、ヨマワルの体

力は半分まで回復した。

さらに、そのサナギラスにサイコネシスのダメージを与えた。

「なに！？　ちつ、ハクリユウ！　かえんほうしゃ！　サナギラスはかみくだくだ！」

ハクリユウのかえんほうしゃとサナギラスのかみくだくはカゲボウズに向かって攻撃された。

カゲボウズはそれらのわざをかわすことなく、ダメージを受けた。

「もう一発だ！」

タツベイはもう一度攻撃をするように指示を出し、カゲボウズも相当のダメージを受けた。

「どうした！　かかってこないのか！　かかってこないなら止めをさしてやるぜ！　ハクリユウ！　かえんほうしゃだ！」

ハクリユウのかえんほうしゃはカゲボウズに向かって放たれた。

「あんたもばかだねえ。カゲボウズ！　みちづれ！」

「みちづれだと！？」

ハクリユウのかえんほうしゃはカゲボウズに当たった。そして、カゲボウズは戦闘不能となった。

だが、ここでみちづれの効果が発動された。カゲボウズが戦闘不能

となったことにより、ハクリユウも戦闘不能となってしまうのだ。

「くっ。ハクリユウ戻れ！」

「戻りな！ カゲボウズ」

両者は戦闘不能となったポケモンをボールに戻した。

「なんて卑怯な……」

「卑怯だって？ ゴーストタイプの力をあたいは引き出してやっているだけだと思うがね。ゴーストタイプには自らが倒れることにより相手に何かしらのものを与えるわざが複数あるのさ。それをうまく利用しただけじゃないか」

「……」

「どうやら、反論の余地なしなようだね。さあ、バトルへと行くか。ヨマワル！ おにびだよ！」

「サナギラス！ かわせ！」

「おにびをサイコネシスで操ってサナギラスに当てちまいな！」

ヨマワルのおにびはサナギラスによってかわされた。だが、その後のサイコネシスによりおにびは自由に操られるようになったため、サナギラスにおにびは当たる結果となった。

「そのままシャドーボールだよ！」

「サナギラス！ かわしながらどくどくだ！」

サナギラスはシャドーボールをかわし、どくどくをヨマワルに当て、どく状態にした。

「どく状態か……。やっかいだね」

「サナギラス！ かみくだくだ！」

サナギラスは間髪をいれずヨマワルにかみくだくで攻撃をした。

「いたみわけだよ！」

ヨマワルはそのかみくだくを受けたことにより再度、ひんし状態に近くなった。だが、いたみわけにより少しながら回復した。

だが、どく状態によりダメージをどんどん奪われていった。また、それはサナギラスも同じだった。

「やけど状態が回復していないとは災難だねえ。ヨマワル！ スキルスワップだよ！」

「しまった！」

ヨマワルはスキルスワップで、サナギラスの特性であるだっぴを手に入れた。

すると、ヨマワルはすぐにごく状態が回復した。

「やったねえ、ヨマワル。さあ、止めをさしちまいな！ シャドー

ボールだよ！」

「サナギラス！　じしんだ！」

「！　しまった！」

サナギラスは一気にじしんを起こした。特性ふゆうを失ったヨマワルはじしんのダメージを受けた。

一方のシャドーボールもサナギラスにダメージを与えた。

両方のわざを受けた、二匹のポケモン。そのわざにより先に倒れたのはヨマワルだった。

「ヨマワル戦闘不……！」

ヨマワルは倒れた。だが、それからすぐサナギラスも倒れてしまった。

「ヨマワル・サナギラス戦闘不能。ですが、先に倒れたヨマワルなので、勝者はセント学校！」

これで、セント学校の一勝が決まった。

タツベイがフィールド上から戻ってきたときにワニノコは言った。

「最後にヨマワルは絶対みちづれを使いましたよね……！」

「ああ。絶対に使ったと思う。サナギラスはあのシャドーボール程度では倒れるはずはなかったんだからな」

「勝利にかける執念ですね……」

「それはどうかな？」

ワニノコとタツベイが話しているとヒノアラシが言ってきた。

「ゲンガーの目的は会場の爆破。できる限り、敵となるポケモンを減らしたいっていうのが理由なんじゃないかな？」

「さすがにそれは考えすぎや」

「そうかな……」

かくして、第一戦はセント学校の勝利となった。次は第二戦目だ。

第十二話終了第十三話に続く……

第13話 「戦略の知恵」

「これより第二試合を始めます。両学校の選手はフィールド上へと上がってください」

第一試合が終わり、少し休憩時間がおかれてから審判がそう言った。

それを聞き、セント学校の第二試合を戦うライチュウはフィールド上へと上がった。

対する相手のダースト学校の選手はあのゲンガーだった。

「ケケケ、俺様の相手はきさまか」

「そうだよ。よろしく」

「ケケケ、よろしくか」

「それでは、これより試合を始めます」

「よっこいー!」

「ケケケ」

「試合開始!」

「行け! ピカチュウとコモルー!」

「ケケケ、やっちまいな！ ゴースト！」

ライチュウはピカチュウとコモルー。ゲンガーはゴーストを二匹出してきた。

「ピカチュウ！ 十万ボルト！ コモルー！ ドラゴンクロー！」

「ケケケ、かわしてのろいだ！」

ゲンガーのゴーストは十万ボルトとドラゴンクローを軽々とかわした。そして、自分のHPを減らしピカチュウとコモルーにのろいをかけた。

「のろいか……。早めに決着をつけないとまずいな……」

「ケケケ、早めになんか終わらせないぜ！ あやしいひかりだ！」

「ピカチュウはこうそくいどうでかわせ！ コモルーはまもるだ！」

ゴーストはあやしいひかりでピカチュウとコモルーをこんらんさせようとしたが、二匹はかわすことができたためこんらん状態にはならなかった。

「ピカチュウ！ かみなり！ コモルーはかえんほうしゃ！」

こうそくいどうですばやく移動していたピカチュウは一気にかみなりをゴーストに落とす。そのため、片方のゴーストはダメージをおった。

コモルーのかえんほうしゃは、まもるを使用した場所からだった

め、簡単にかわされてしまった。

「ケケケ。もう一回あやしいひかりだ！」

「もう一度さつきと同じ方法でかわすんだ！」

ピカチュウはこうそくいどうで、コモルーはまもるであやしいひかりから身を守った。しかし

「ケケケ、そう来ると思ったぜ。さいみんじゅつだ！」

二匹のゴーストはピカチュウにダブルさいみんじゅつをかけた。ピカチュウはねむり状態となってしまった。

「ピカチュウ！」

「ケケケ、ゴースト！ あくむだ！ その後はゆめくいでじわじわとダメージを与えていけ。あまつてるお前はコモルーの相手をするぞ」

ゲンガーは片方のゴーストをピカチュウに。もう片方のゴーストをコモルーに仕向け、一対一とした。

だが、ピカチュウはねむり状態のため、戦える状況ではなかった。

「コモルー！ ピカチュウを攻撃しているゴーストにドラゴンクロードだ！」

ライチュウはピカチュウを助けようとして、コモルーを向かわせた。

「ケケケ、ダメき。ゴースト！ あやしいひかり！」

「コモルー！ かわせ！」

ゴーストは走っているコモルーにあやしいひかりを試みた。だが、それはかわされてしまった。

「ドラゴンクロー！」

そして、ピカチュウを攻撃しているゴーストに対してドラゴンクローを試みた。

だが、それは失敗に終わってしまった。

「こ、コモルー！？」

ゴーストにドラゴンクローをする直前にドラゴンクローが止まり、コモルーは倒れたのだ。

「ケケケ、どうやら気が付かなかったようだな」

「なに？」

「ケケケ、コモルーに仕向けたゴーストはナイトヘッドでさりげなく攻撃していたのさ」

「なんだって！？ そんな気配などなかったのに……」

「ケケケ、そりゃそうさ。なんつたって、ゴーストはコモルーの後

るにずっと付いていたんだからな」

「ずっと付いていただけ!?」

「ケケケ、そうさ。お前が見ていたゴーストはかげぶんしんのゴーストなのさ。本物のゴーストはコモールの後ろに隠れながら攻撃していたのさ。さあ、ゴースト！ そのピカチュウもやっちまいな！」

ゲンガーがそう指示すると、二匹のゴーストがピカチュウにゆめくいを始めた。

コモールは戦闘不能となってしまうため、動くことができず、ピカチュウも眠ってしまっていることから反抗することができなかつた。

そして、そのままピカチュウは戦闘不能となってしまった。

「ピカチュウ戦闘不能。よって勝者はダースト学校」

「そ、そんな……」

「ケケケ。たいしたやつじゃねえな」

ゲンガーはそう言うとゴーストをボールに納め、フィールドから降りた。

そして、ライチュウも悲しい顔をしながらポケモンをボールに戻し、フィールド上から戻ってきた。

「先輩……」

「どんまいだ、ライチュウ。お前もよくやったさ」

「うん……。でも、負けてしまった……」

「気にするなつて。次で勝てばいいんだからよ」

だが、次の試合は行われるかは微妙な状態だった。

以前、記述したが、引き分けの場合勝者同士がシングルバトルで戦わなければいけない。

だが、タツベイは二匹しか手持ちがおらず、その二匹とも戦闘不能となっている。ということはタツベイは戦うことができないのである。

しかし、セント学校にはまだ控え選手がいるし、ゲンガー自身も手持ちを五匹持っているとのことで、別に試合をすることはできた。だが、問題なのは、大会ルール上、勝者同士が戦うということから控え選手が代理で出ていいのかというものだった。

この件については、可否が審判団や大会事務局の長い時間討論された。

「長いな……」

そんな中ワニノコはそうつぶやいた。

「仕方ないよ。まさか、こんな事態になるとは思いもしなかったん

だろうからね」

「でもよ、ヒノアラシ。どんな状況が起きても大丈夫なようにするのが大会事務局の役割だと思っただけだ」

「まさか、二匹同時戦闘不能なんてことはありえるとは思わなかったのよ。ところで、次の試合がもし行われるなら、ワニノコがでるのよね？」

「ああ。ヒノアラシとチコリータは昨日出だし、先輩方はもう戦ったから俺しか残ってないからね」

すると、審判がフィールド上へと戻ってきて結論を出した。

「第三試合は、セント学校側の控えの選手が出てダースト学校のゲンガー選手と戦うこととなりました」

「ってことは……」

「試合を再開します！」

「よっしゃー！」

ワニノコは思わずガッツポーズをした。戦えることがうれしいのである。

そして、ワニノコはフィールド上へと上がった。そこにはすでにゲンガーが来ていた。

「ケケケ、お前が相手か」

「そうさ。お前のすきにはさせないぜ」

「ケケケ、残念ながらもう遅いぜ」

ゲンガーはそう言うと審判の持っているマイクを取り上げた。

「ケケケ、この会場には俺たちが爆弾を仕掛けた!」

ゲンガーがそう言うと会場は一気にざわついた。歓声とは違う驚きのもの。そして、恐怖の声だった。

「ケケケ、黙れ! 俺が今から一分間だけ猶予をやる。その間にこの会場から立ち去れ! 一分後には会場を爆破する。逃げ遅れた奴がいたとしてもな!」

「ゲンガー! きさま!」

「おっと、それ以上動くなよワニノコ。きさまが変な行動をしたらジユペッタが持っているスイッチを押すぜ。そしたら、どうなるかわかってるんだろっな?」

「くっ」

「さあいまから一分だ! とっとなと行け!」

ゲンガーがそう言うと、会場の観客はいつせいに出口へと向かった。そのため、出口付近は人だかりができてとも窮屈な道へと変わっていた。

フィールド上にいた審判も、とつと引いてしまいフィールド上にはワニノコとゲンガーだけが残っていた。

「ケケケ、お前はいかないのか？」

「行けるもんか！ 俺はお前達をくい止めてやるぜ」

ワニノコはそう言うつと腕につけているホルダーに触った。すると、ゲンガーが言った。

「おつと。それ以上、動くなよ。それ以上動いたか爆破するぜ」

「ワニノコ！」

すると、フィールド上にヒノアラシとチコリータがやってきた。

「早く行きましょう。ここは危険よ」

「そうだよ。早く、ワニノコ」

「だけど……ゲンガーが……」

「ゲンガーなんてゴーストタイプよ。爆発してもダメージは受けないの。さ、行くわよ」

チコリータはそう言うつと、つるでワニノコをつかみ、急いで外へ出て行った。

一体、国内学校別大会はどうなってしまっただろうか……。

第十二話終了第十四話に続く・・・

第14話 「謎の後の爆破」(前書き)

準決勝第二戦を負けてしまったセント学校。引き分け試合をする時にゲンガーが爆発を起こすといいい会場はパニックになり、急いで非難するのだった。

第14話 「謎の後の爆破」

非難は一分で済むはずなどなかった。観客は何万にもおり、大勢が一分以内で逃げることなどできやしないのだ。

だが、その予想は反された。意外にも観客は全員非難することになったのだ。

これには関係者や一般の人々も驚いた。

「変だな……」

その様子を見ていて、すでに非難をしていたワニノコはそうつぶやいた。

「なにが？」

「いや、どう考えてもすでに一分以上たってるはずなんだけど爆発しない」

「そういえば、もう一分以上たってるような……」

「どつちやらつそだったようだな。行くぜ！」

ワニノコはそう言う与会場の入り口へと走っていった。

「あっ！ ワニノコ！」

それを見たヒノアラシとチコリータはワニノコを追った。

会場入り口は多少避難者がいたためこんでいたが、ワニノコはそれをおしきり会場へと入っていった。

そして、ワニノコが少し奥まで入ったとき、入り口付近が爆発した。

「うわっ！」

ワニノコを追っていた二人は入り口付近に来ていたため、爆風を受け後ろへとふっとばされてしまった。

そして、入り口付近の人々は騒ぎ立て始めた。

「そんな……！」

その爆発により入り口は完全に封鎖されてしまった。これ以上奥に進むことはできない。

「これじゃあ、ワニノコを追いかけれないよ」

「ええ……。こうなれば選手用入り口から入りましょう」

ヒノアラシたちは一般入り口から選手用入り口へと向かった。

一方、その頃ワニノコは会場の観客席へと来ていた。

フィールド上にはゲンガー、ジユペッタ、ヘルガーがいる。

「ゲンガー！」

「ケケケ、やっぱり来たかワニノコ」

ワニノコはピジヨットを出し、フィールド上へと降り立った。

「お前、一体どんなつもりでこんな脅しをかけたんだ？」

「ケケケ、脅しだと？ なにが脅しなものか。現にこの会場に入るための入り口はすべて爆破したぜ」

「なに？」

「ケケケ、お前がここに来るのを待っていたんだよ」

「なんだと！」

「ケケケ、お前は俺たちの目的を知っている。この大会をめっちゃにするといいな。それを知っている危険な芽は早めに摘むのさ」

「だけど、俺以外に知っている奴も……」

「ケケケ、そんなことはわかってるさ。それよりも一番危険なのはお前を倒すのが一番いいのさ。さ、行くぞ！ ムウマ！」

「あいよ！ 行きな！ ハブネーク！」

「わかった。行け、コノハナ」

ゲンガーはムウマ。ジユペッタはハブネーク。ヘルガーはコノハナを出してきた。

「くっ！ 行け！ ピジヨット！ カメックス！」

こうして、ゲンガーたち対ワニノコのバトルが始まった。

ワニノコたちが会話をしていたとき、ヒノアラシたちは選手用入り口へとやってきていた。

「ダメだわ……。ここも爆破されてがれきでふさがれているわ」

「どうしよう……。これじゃあ、いくら経っても中に入れないよ」

「ええ……」

その時、ガラスの割れる音がヒノアラシたちに聞こえた。

それを聞いたヒノアラシたちは外へと出た。すると、近くにガラスの破片が落ちていているのを見つけた。

ガラスの破片が落ちているところの上を見ると、ガラスが割れていて中に入れるようなあなができていた。

「あそこからなら入れそうね」

「でも、どうやって入るの？」

「私のエアームドで入れればいいわ」

チコリータはエアームドを出し、二人はその上に乗った。

そして、二人は会場内へと入ることができた。

「ありがとう、エアームド。さあ、行くわよ」

「ハイドロポンプ！」

そんな頃ワニノコたちはすでにバトルを始めていた。

ハイドロポンプはムウマに飛んでいったが、やすやすとかわされてしまった。

「ケケケ、遅いぜ！ シャドーボール！」

「ポイズンテールだよ！」

「タネマシンガンだ！」

三つの攻撃が一気にカメックスへと飛んでくる。

「からにこもるで防ぐんだ！ ピジヨットはふきとばしでできる限り威力を落とせ！」

カメックスはからにこもり防御体制に入った。ピジヨットはふきとばしで、わざの威力を落とすのを試みた。

だが、ピジヨットのふきとばしで防げたのはシャドーボールとタネマシンガンだけで、ハブネークのポイズンテールは防ぐことはできなかった。

「そのままかみくだくんだよ！ ハブネーク！」

「カメックス！ ハイドロポンプ！」

ハブネークはそのままかみくだくで攻撃をしてきたが、カメックスのハイドロポンプでかみくだくは失敗に終わり、ダメージも受けた。

「ケケケ、十万ボルトだ！」

「はかいこうせんだよ！ ハブネーク！」

「もう一発タネマシンガンだ！」

「カメックスはハイドロポンプ！ ピジヨットはゴッドバードだ！」

ムウマの十万ボルトとコノハナのタネマシンガンはカメックスにハブネークのはかいこうせんはピジヨットに飛んでいった。

ワニノコはそれらのわざをかわし、攻撃するように指示を出した。だが、カメックスは何とかかわせ、攻撃ができたものの、ピジヨットはかわすことができずに、地上へと落ちてきた。

「ピジヨット！」

「ケケケ、十万ボルトだ！」

落ちてきたピジヨットにムウマは十万ボルトを与え、ピジヨットは戦闘不能となってしまった。

「戻れピジョット！」

「ケケケ、これで俺たちの勝利も同然。カメックスなど敵ではないわ」

「そんなことはやってみなきゃわからないだろ！ ハイドロポンプだ！」

カメックスはムウマに向かってハイドロポンプを放った。だが

「ケケケ、かげぶんしんだ！」

ハイドロポンプはかげぶんしんによりかわされてしまった。

そして、カメックスはコノハナからのタネマシンガンでダメージをおってしまった。

「くっ」

「ケケケ、これでとどめだ！ かみなり！」

「はかいこうせんだよ！」

「ソーラービーム！」

三匹は一気に攻撃をカメックスへと放った。カメックスはもうかわす術がない。

「かえんほうしゃ！」

「ソーラービーム！」

そのときだった。カメックスに向かっていったわざが途中ではじけ、カメックスにダメージを与えなかった。

あたりはその爆風による煙でたちこもった。

「ケケ!? 一体なにが!?!」

「あなたのすきにはさせないわ！」

煙が晴れ、観客席のほうを向くと、そこにはヒノアラシとチコリータ。リザードンとフシギバナがいた。

「ヒノアラシ! チコリータ！」

「ワニノコ大丈夫だった？」

「ああ。大丈夫だ」

ヒノアラシとチコリータもフィールド上へとやってきた。

「ケケケ、仲間か……。どうせ、ガラスでも割り中にでも侵入してきたんだろう」

「だからいったんだ。廊下も爆破しておけとな」

「ケケケ、いまさら言ったって遅いんだよ、ヘルガー」

「ともかく、やつらをやっちまわないとね」

「そんなことなんかさせるか！ 俺たち三人が集まればお前達なんか敵じゃないぜ！」

「ケケケ、いつまでそういつてられるかな」

第十四話終了第十五話に続く・・・

第15話 「爆破の理由」(前書き)

時間になっても爆破されないということを考え会場へと入っていたワニノコ。そこで、ダースト学校の選手達と戦うことになるが、負けそうになった。その時、ヒノアラシとチコリータの助けが入ったのだった。

第15話 「爆破の理由」

「カメックス！ れいとうビームだ！」

「リザードン！ かえんほうしゃ！」

「フシギバナ！ はっぱカッターよ！」

「ケケケ、ムウマ！ シャドーボール！」

「ハブネーク！ ヘドロばくだんだよ！」

「コノハナ！ タネマシンガンだ！」

隠れ準決勝第三試合が始まった。両学校の選手達は一気に攻撃を始めたのだ。

カメックス、リザードンの攻撃はコノハナに向かっていった。そのコノハナのタネマシガンはカメックスに飛んでいったため、ハイドロポンプとタネマシガンはぶつかり合い、打ち消しあった。

一方、リザードンのかえんほうしゃはコノハナに命中し、こうかはばつぐんのダメージを与えた。

フシギバナのはっぱカッターはムウマに飛んでいった。だが、一部のはっぱカッターはシャドーボールにより落とされ、少ししかダメージは与えられなかった。

ハブネークのヘドロばくだんは無条件でフシギバナに当たった。

「リザードン！ もう一回かえんほうしゃだ！」

「コノハナ！ かげぶんしん！」

「フシギバナ！ はっぱカッターよ」

リザードンはかえんほうしゃでコノハナを攻撃する体勢に入った。だが、かげぶんしんをされたためどれに攻撃をしていいのかわからなくなった。

しかし、フシギバナの無数のはっぱカッターにより本物のコノハナが発見され、リザードンはかえんほうしゃをコノハナに命中させることができたのだった。

「よし、コノハナは戦闘不能だ」

「くっ、戻れコノハナ。ゲンガー、ジュペッタ。後は頼んだ」

「ケケケ、弱いやつめ。ムウマ！ 十万ボルト！」

「ハブネーク！ ポイズンテールだよ！」

ムウマの十万ボルトはカメックスに。ハブネークのポイズンテールはフシギバナへと向かっていった。

「まもるだ！ カメックス！」

「フシギバナ！ ねむりごなよ！」

「リザードン！ かえんほうしゃでハブネークを攻撃するんだ」

カメックスはムウマの十万ボルトをまもるで防いだ。

フシギバナはハブネークを眠らせ、ポイズンテールを止めようとしたが、かわされてしまい、ポイズンテールを受けそうだった時に、リザードンのかえんほうしゃでダメージを受けずにすんだ。

「ありがとう、ヒノアラシ」

「どういたしまして。さあ、次行こう」

「ええ。フシギバナ！ せいちょうからギガドレインよ」

「カメックス！ ハブネークにこうそくスピンだ！」

「ムウマ！ かみなり！」

「ハブネーク！ ポイズンテールで返り討ちだよ！」

「そんなことなんかさせない！ リザードン！ ハブネークの尻尾にかえんほうしゃだ！」

フシギバナはせいちょうによりとくこうを高め、ギガドレインでムウマを攻撃した。

そのムウマはかみなりでカメックスを攻撃したが、こうそくスピンをしていたため、当てることはできなかった。

そのこうそくスピンはハブネークに向かっていったが、ポイズンテ

ールで逆に攻撃されるときに、リザードンが尻尾にかえんほうしやで攻撃をしたため、ポイズンテールはとかれ、こうそくスピンは普通に当たった。

「ケケケ、これはまずいんな……」

「そうだねえ。ここは爆破準備をしたほうがいいじゃないのかねえ？」

「ケケケ、そうだな。おい、お前らそれ以上動いたらこいつを押すぜ」

ゲンガーはそう言って、なにかのスイッチを出した。

「くっ、爆破スイッチか……。卑怯な奴め」

「ケケケ、負けそうになったらこうなるつもりだったのさ。さあ、そいつらをボールに戻せ」

ワニノコたちは、ゲンガーの指示通りポケモンたちをボールに戻した。

「ケケケ、これできさまの始末ができるな。最初からこうすりゃあよかったんだ」

「しかたないだろ。おまけが後から付いてきてしまったんだからな」

ヘルガーがそう言った。

「ところで、ヘルガー。あんたは逃げなくていいのかねえ？」

「逃げるにも逃げようがないからな。出入り口はふさがっているんだからな」

「ケケケ、ガラスを割って外に出ればいいだろ」

「それも考えたが、外には人がいっぱいいた。逃げられしない」

「ケケケ、しかたねえ。作戦通り爆破させてもらっぜ。俺の目的のためにな」

ゲンガーがそう言ったとき、ワニノコは言った。

「一体、お前はどんな目的があつてこんな真似をするんだ？」

「ケケケ、いいだろう。最後だから説明してやろうか。俺は兄貴の仇のため。復習のためにこいつを爆破するのさ。兄貴は優秀なトレーナーだった。そして、この大会にも出場したのさ。だが、それが今の俺を作り出す原因となった。

兄貴の学校は俺たちと同じダースト学校だった。そして、その年の大会で決勝戦までのぼりつめた。そんな決勝戦を控えた前日に事件は起きた。兄貴はその夜に外へ練習に行った。そのときだった。国内学校別大会事務局員の車が兄貴をひいたのさ。そう、交通事故だ。その交通事故で兄貴は大手術が行われたが、死んだ。そう、この大会に来たあまりに命を落としたのさ」

「でも、何でお前の兄さんが交通事故で死ぬんだ？ ゴーストタイプだったらそんなことはないだろう」

「俺の兄貴はマタドガスだ。ゴーストタイプじゃねえ。それで

俺はこの大会を憎んだ。そして、決めたんだ。兄貴みたいな力をつけ、この大会に参加しめちやくちやにしてやるうつてな！」

ワニノコたちはそれを聞いて驚きと同情を持った。だが、同情は一部だけで同情できない部分もあった。

「でも、大会を憎んでめちやくちやしよつなんて間違ってるよ！」

同情できない部分をヒノアラシが口に出した。

「そんなことなどない！ すべてはこの大会が悪いんだ！ ならこの大会をめちやくちやし開催できなくなるようにすればいいんだ！ さあもう話しはここまでだここでお前達は消えちまいな！」

「やめろ！」

ワニノコはそう言い走り出した。ゲンガーがスイッチを押すのをとめようとしたのだ。

だが、それは間に合わなかった。ゲンガーはそのスイッチを押してからワニノコはゲンガーに飛びついた。

三人はそこで死を覚悟した。爆破され、がれきに埋もれてしまい死んでしまうのではないかと。

「あれ………？」

しかし、数秒たつてもがれきなど落ちてこない。それどころか、まるで宇宙空間にいるように静かだった。

「ケケ？ 一体なにが……。なんで、爆発しないんだ」

ゲンガーはその現状を見て、スイッチを何度も何度も押しした。しかし、いっこうに爆発される気配はない。

「チャンスだ！ ゲンガー！」

スイッチを押しても爆破しないことを知ったワニノコはゲンガーに飛びつき、スイッチを奪った。

「ケケケ！ そいつをかえせ！」

「こいつを返したところで、爆発はしないんだ。なんの意味もないぜ」

「ケケケ！ 一体どうなってるんだ！ ヘルガー！ どういうことだ？」

「わからない。オレはちゃんと設置した」

「ケケケ、いい加減なことをいうんじゃない！」

「本当のことだ！」

「ゲンガー。どうやら、これはあたいたちの負けのようだねえ」

「ケケ、しかたない……。ここはいったん引き上げるとするか……」

ゲンガーはそう言うと、その場から消え去り、またジュペッタも消えた。そして、その場には四人だけが残った。

「お前は行かないのか？」

ワニノコがヘルガーに聞いた。

「オレは、ゴーストタイプじゃないからな。逃げるにも逃げられないんだよ」

「確かに逃げることはできないわね。でも、この場から出ることはできるわ」

「確かにな。まあいい。オレはお前達がいなくなり、誰もあたりにいなくなったらこっそり逃げるさ」

「でも、そのことを誰か外部の人たちに僕たちがしゃべったらひとたまりもないよ」

「それはそれでなんとか逃れるさ。さあ、早く行け。お前達としゃべっていてもここから逃げることなどできないのだからな」

ヘルガーはそう言うと、がれきでふさがれている選手用入り口へと向かい歩いていった。

ワニノコたちはそれを見届け、割れたガラスから外へ脱出して、会場を後にしたのであった。

第十五話終了第十六話に続く・・・

第16話 「衝撃」(前書き)

ダースト学校のゲンガーたちのたくらみの会場爆破を阻止すべく戦ったワニノコたち。なんとか、爆破は阻止できるのだった。

第16話 「衝撃」

ワニノコたちは脱出する時にいた人にもう大丈夫だと説明をした。

それにより、大会スタッフは入り口のがれきなどをどかさ作業を行い始めた。

しかし、思ったより量があり、時間がかかり、結局、決勝戦は予定の日には行われることはなかった。

それどころか、状況が状況だけに決勝戦を行うべきではないのではないかという話しも持ち上がり、決勝戦が行われるかも微妙な状況となってしまうた。

「ああ、ゲンガーたちのせいで決勝戦ができない雰囲気になっちゃったよ」

ホテルの部屋でヒノアラシはそうつぶやいた。

「本当だよ……。何のため、ここまで戦ってきたのかわかりやしない」

「ダースト学校は不戦敗となって私たちの勝ちになっただけいいと思いなさいよ。ベスト二にまでこれでなれたんだからね」

「でもなあ。やっぱり決勝戦はやりたいよ」

ワニノコがそう言うと部屋に誰かがやってきた。

ドアをチコリータが開けるとそこにはライチユウとタツベイがいた。なにやら、校長から話しがあるから校長の部屋に来るよう言われたそうだ。

「今度の決勝戦だが……」

校長であるフーデインの部屋に入りイスに座った時フーデインはそう話しを切り出した。

「決勝戦はぶじ行われることとなった」

「本当ですか!？」

「本当だ。大会事務局から連絡があった。ただし、明々後日にやるとのことだ」

「明々後日とはずいぶんとおいでですね」

「なんでも、会場の調整をしなければいけないとのことだ。今後、明後日までは自由時間とするから、自主トレなり休息なり好きにするといい。ただし、危険なまねだけはしないようにな」

自由時間といわれても特にすることなどワニノコたちにはなかった。

以前、ゲンガーたちのもくろみを知った時に自由時間は有意義に使ったし、自主トレをするにもこのあたりにそれをする場所があるかどうかもわからないからできないのだ。

かといって、部屋にずっといてもつまらないので、ワニノコたちは会場の様子を見ることにした。

試合の時は会場までバスで行くのだが、この日はバスなど来てはいないため歩きで行った。

しかし、バスで行くほどの距離なのだから、歩きだとバスの三倍の時間がかかった。

「なんかあわただしいなあ」

会場へと付いたワニノコはそうつぶやいた。

会場には、さまざまなかとうポケモンや指示を出すポケモンなど多数いた。どうやら、まだ、復旧作業をしているらしい。

「こんな状況で明々後日に試合なんかできるのかな？」

「まあ、そう言ったんだからちゃんとやるんでしょっよ。気長に待つしかないわね」

すると、後ろから声がしてきた。

「おいこんな状況で大丈夫なのかよ？」

「大会事務局が言ったんだから大丈夫よ。ちゃんと明々後日には直ってるわよ」

それを聞いたワニノコたちは後ろを振り向いた。

なんとなく聞いたことがある声。そして、話していることも今自分達が話していたことである。

後ろを見るとそこには、キルリアとアチャモが立って話していた。

「あれ？　もしかして？」

ワニノコは二人を見るとどこか見覚えのある人たちだった。

「あら？　あなた達は。船の甲板で会った人たちですよね？」

キルリアがワニノコたちを見て言った。

「やっぱりそうだ！　船で会った人たちだ」

「アチャモを探していたキルリアね」

「そうです。その節はどうも」

「いえ、何の役にも立たなくて」

「いえいえ、そこでこの焰と再会できましたから。ところで、あなた方はここでなにをしているんですか？」

「僕たちは、会場の様子を見に来たんです」

「あら？　偶然ね。私たちも会場の様子を見に来たのよ」

「もしかして、お前達はセント学校の人たちか？」

ここで一言も話さなかったアチャモの焔が言った。それに対してチコリータは言った。

「そうですけど……」

「なんとというめぐり合わせなんだ！ オレたちはESF学校っていう学校の所属しているんだ」

「ESF学校？」

「ワニノコ……。決勝戦の相手はどここの学校か知らないの？」

「ああ……」

「決勝戦の相手はESF学校よ」

「え！？ ってことは……」

「そう、このキルリアとアチャモの二人が決勝戦の相手なのよ！」

ワニノコは呆然とした。まさか、こんな所で決勝戦の相手と出会い、その前に船で会っていたとは思ってもしなかった。

呆然とはしなかったが、ヒノアラシとチコリータも驚いているようだ。

「そうみたいですわ。私はミキ」

「オレは焔だ。よろしくな」

三人は軽く自己紹介した。

「それじゃあ、明々後日に再度お会いしましょう。決勝戦は楽しみにしていますよ」

三人が自己紹介をし終わると、キルリアのミキと焰はその場から去っていった。

「まさかまさかのめぐり合いだな……」

「そうね……。ここで言うのも変だけどESF学校は昨年の大会で優勝した学校よ」

「去年の大会で？　じゃあ、二連覇がかかってるんだ」

「そう言うことね。これは気を締めないとダメみたいね」

それからワニノコたちは街を歩いた。そう、自主トレをすることができそうな場所を探すためだ。

昨年の覇者ともなろう学校との戦いなのに、なにもせず迎撃するのはさすがに無防備すぎる。ちゃんと、練習しておくことを考えたのだ。

そして、その日から二日がたった日の夜。

決勝戦の前日で寝付けなかったワニノコは外へと散歩に出かけた。

明日の決勝戦のために早めに寝たいところだが、寝付けないのだから逆に散歩でもしたほうが寝れるのではないかと思ったのだ。

その晩は月明かりがあり、外は多少明るかった。

ワニノコはその足で、海岸沿いまで向かった。

「ついに明日が決勝戦か……」

ワニノコは今までの戦いを振り返った。

クラス対抗のバトル大会が行われたときには国内の強豪と戦うなんて夢にも思っではいなかった。

クラス対抗バトル大会が終わり、選抜戦での戦い。選抜戦はあっさりとクリアしてしまったが、チコリータの試合に熱が入った。

それから、国内学校別大会へと移り、明日の決勝戦の相手であるミキと焔のESF学校の選手と船で出会い、それから予選が行われた。

予選最終試合では、強豪のブレイジング学校を倒し、準決勝ではゲンガーたちと爆破の可能性と隣り合わせのなか戦った。

そして、ついにここまでできたのだ。考えれば、たくさんの経験をつんだ気がする。ワニノコは思ったのだった。

「ワニノコ」

ワニノコがその思いに浸っている時にワニノコを呼ぶ声が聞こえた。

その声が聞こえた方向を向くとそこには見覚えのあるオーダイルが

立っていた。

「父さん！」

「ついに明日が決勝戦か」

「え、ああ……」

「がんばるがいい……」

オーダイルはそう言うとバンギラスを出しすなあらしを起こさせた。

そのすなあらしでワニノコの視界は悪くなった。すなあらしが晴れたとき視界はよくなったがそこにはオーダイルの姿はなかった。

「父さん？　もしかして今は夢……？　そんなわけないか……。すなあらしを起こせるわけがないもんな……」

ワニノコはホテルへと戻った。

父との謎の再会を果たしたワニノコの胸は躍っていた。だが、明日の試合のためそれをがんばってしずめ、夢の中に入っていくのであった。

決勝戦当日。ワニノコたちはいつもより早く起きた。早く起きたため、朝食はまだ取ることではできなかった。外へ散歩に出かけた。

散歩から帰ってくると、食事の用意が整っていたため朝食を取った。

決勝戦は午後から行われるため、午前中はミーティングを校長の部屋でした。

「今日は決勝戦だが、誰が出場する？」

ミーティングの初めに校長のフーデインがそう言った。

「ぼくは準決勝が最後の試合だと思っていました。負けたからといって今回やるようなまねはしませんよ」

「おれもライチュウと同じだ。準決勝で最後だと思っていたんだ。今日はパスします」

「わかった。では、五年生の諸君でやりたいものはいるかね？」

「はい！ はい！ 俺やりたい！」

「僕はいいです……。大舞台上で戦う勇氣なんてないし……」

「私もいいわ。決勝戦の舞台上で戦うなんてことはめったにないことだけど、後で責任押し付けたりされたら困るしね」

「誰も押し付けやしないさ」

「それでも私はいいわ」

「うむ……。では、ワニノコは決定としてあと一人はどうするか……。本当にやる気はないのか？」

試合に参加しないと云った四人は「はい」と返事をした。

「では、教頭。だれか、推薦者はいないか？」

校長は、近くにいた教頭のユンゲラーにそう聞いた。

「ヒノアラシかライチュウが言っています」

「わかった。ならば、ヒノアラシとライチュウのどちらに出てもら
うとするか」

「先輩、僕……」

「わかっているよ、ヒノアラシ。君が出たくない気持ちはわかる。
けど、ここで君は力をつけ来年の試合に出場する機会があったらこ
の経験は良いものになると思う。だから、ここは君が出たほうがい
いんじゃないか？」

「でも、緊張してうまく戦えそうもないし……。それに、先輩こそ
最後なんだから経験を試してみたらいいんじゃないですか？」

「ぼくはいいよ。ここまでこれたという経験こそが最後の喜びさ。
さあ、がんばってくれヒノアラシ」

「ヒノアラシ。ライチュウの気持ちも考えてやってくれ」

「……。わかりました」

「よし決まりだな。それじゃ、各自練習を始めてくれ。十二時にな
ったら再度ここに戻ってきてくれたまえ」

ワニノコたちは前に探していた場所で自主トレをした。それから、十二時になり校長の部屋に戻っていくとそこで昼食を取ることになった。

そして、昼食後は少し休憩し、決勝会場へと向かうのだった。

第十六話終了第十七話に続く・・・

第17話 「国内学校別大会決勝戦 -前編-」 (前書き)

決勝戦が数日立ってから行われることとなった。その数日の間は暇だったワニノコたちは会場の様子を見に行く。そこで、船であったキルリアとアチャモが決勝戦の相手と知るのであった。そして、ついに決勝戦が始まるのだった。

第17話 「国内学校別大会決勝戦 - 前編 -」

決勝会場には準決勝のときよりもはるかに多くの観客が来ていた。準々決勝とは比にならないほどだった。

「す、すげえ！」

その観客の多さを見てワニノコは驚き、感動した。

そして、試合開始時間が近づき、フィールド上に全員上がった。そこには、ESF学校の選手もいた。

ESF学校の選手四名のうち二名はあのキルリアのミキとアチャモの焰であった。

「それではこれより国内学校別大会決勝戦を行います」

審判であるハッサムがそう言い両学校の選手は一斉に礼をした。

そして、第一戦を戦うヒノアラシと焰だけはフィールド上に残り、他の選手は下へと戻った。

「お前が相手か。悪いが手加減はしないぜ」

「こつちだって！ 絶対に負けないよ！」

二人は握手をし、そう言い合った。そして、バトルする時の定位置についた。

「それではこれよりセント对学校対ESF学校の決勝戦第一試合を開始します。それでは試合開始！」

「頼んだよ！ リザードンとダグトリオ！」

「行け！ 火山と七海！」

ヒノアラシはリザードンとダグトリオ。焔は、バクフーンの火山とラプラスの七海を出してきた。

この時点でヒノアラシは苦手なみずタイプのポケモンが出てきたため、不利な状況となった。

「リザードン！ 空中に飛び上がってかえんほうしゃ！ ダグトリオ！ じしんだ！」

「ジャンプしてじしんをかわせ！」

うまく火山と七海はジャンプをしてじしんをかわした。だが、七海めがけて発射されたかえんほうしゃはかわせなかった。

「ダグトリオ！ トライアタック！ リザードン！ アイアンテールだ！」

トライアタックは火山に。アイアンテールは七海へと向けられた。

「火山！ かえんほうしゃでトライアタックをとめるんだ！ 七海！ かみなりだ！」

トライアタックは火山のかえんほうしゃとぶつかり合った。結果

は引き分けだったが、火山優先だったようだ。

一方、アイアンテールをするために至近距離へと入ったりリザードンは七海のタイプ違いのかみなりで大ダメージをおった。こうかはばつぐんだった。

「七海！ みずのはどうだ！」

「ダグトリオ！ トライアタックでリザードンを助けるんだ！」

七海はみずのはどうでリザードンを攻撃しようとした。だが、そのわざの一部はトライアタックによって防がれたが、少しばかりダメージは与えた。

「火山はかえんほうしゃ！ 七海はサイコネシスでリザードンを追い返すんだ！」

「ダグトリオ！ あなをほる！」

火山のかえんほうしゃはダグトリオめがけて飛んでいったが、ダグトリオはあなをほるでそれをかわした。

一方のリザードンはサイコネシスによるダメージを受けながら、ダグトリオのあなに近い場所まで投げ飛ばされた。

「リザードン！」

「手は緩めないぜ！ 火山！ かみなりパンチ！ 七海！ ダグトリオのあなにれいとうビームだ！」

「リザードン！ メガトンパンチで対抗だ！」

かみなりパンチをするために接近してきていた火山に対しリザードンはメガトンパンチで迎え撃った。

二匹のパンチは同時にあたったが、その場を動かさず気合を見せていた。

「今だ！ ダグトリオ！ あなをほる攻撃！」

二匹がぶつかり合っている時、地中にいたダグトリオは火山にあなをほるで攻撃をした。こうかはばつぐんであったため、かみなりパンチとメガトンパンチのぶつかり合いはそれにて終了した。

七海のれいとうビームは無駄に終わってしまっていた。

「まだまだ！ 火山！ おんがえし！ 七海！ みずのはどう！」

「リザードン！ だいもんじ！ ダグトリオ！ トライアタック！」

リザードンに向かっていった七海のみずのはどうは、だいもんじとぶつかり合った。

炎は水に弱い。それが、常識だが、この場は違った。だいもんじの火力が強く、みずのはどうをどんと蒸発させていつている。

そして、全部蒸発してしまったみずのはどうがなくなり、だいもんじは七海にダメージを負わせた。

火山のおんがえしはダグトリオに向かっていったのだが、攻撃す

る瞬間にトライアタックを放たれ、かわすまもなくダメージを受けた。

「ちっ。ここまでやるとはな」

「まだ勝負はこれからだよ！ リザードン！ だいまんじだ！」

「火山！ かみなりパンチ！ 七海！ まもる！」

リザードンのだいまんじは七海へと向かって発射されたため、だいまんじはまもるによってかき消されてしまった。

そして、だいまんじを発射したばかりのリザードンに火山のかみなりパンチが襲った。

「リザードン！ ダグトリオ！ バクフーンにトリアタック！」

リザードンに攻撃している火山に向けてダグトリオはトリアタックを発射した。火山はパンチしたばかりだったため、かわすことはできたが少しながらダメージを受けた。

「七海！ れいとうビームだ！」

火山がトリアタックをかわした直後に、七海はれいとうビームを発射してきた。標的はダグトリオだ。

「リザードン！ かえんほうしゃでそれを溶かすんだ！」

リザードンはれいとうビームに向かってかえんほうしゃを放とうとしたときだった。火山のかみなりパンチがリザードンを襲った。

それにより、リザードンはダメージを受けかえんほうしゃも途切れてしまい、ダグトリオにれいとうビームは当たってしまった。

「リザードン！ メガトンパンチ！」

リザードンはかみなりパンチで攻撃してきた火山にメガトンパンチを一発入れた。

それにより、火山はいったん、リザードンから離れた。

「なかなかやるな。だが、そろそろ終わりだぜ」

「わかってるよ……。体力もそろそろ限界だろうしね」

「さあ行くぜ！ 火山！ かえんほうしゃ！ 七海！ ハイドロポンプ！」

「リザードン！ ブラストバーン！ ダグトリオ！ じしん！」

火山のかえんほうしゃはダグトリオへ。七海のハイドロポンプはリザードンへと飛んでいった。

リザードンのブラストバーンは七海へ。ダグトリオのじしんはフィールド全体に響いた。

それぞれのわざは全員にぶつかった。思い通りの敵に当たったのだ。

そのわざにより、リザードンと火山は倒れた。しかし、何とかダ

グトリオと七海はわざに耐えた。

「リザードン。バクフーン戦闘不能」

審判のハツサムが言った。

「よくやった、リザードン」

「戻れ、火山。よくやったな。さあ、これで一対一だ。今のわざで決めるつもりだったが、そうもいかなかったようだな」

「それはこっちのセリフだよ。さあ、攻撃いくよ！ トライアタックだ！」

「七海！ かみなりだ！」

トライアタックはかみなりによって防がれ、両者のわざは消滅した。

「七海！ サイコネシスだ！」

「ダグトリオ！ あなをほるだ！」

ダグトリオはあなをほり地中に隠れサイコネシスから身を守った。

「七海！ あなにむかって、ぜったいれいどだ！」

七海はダグトリオのほったあなにぜったいれいどを放った。それにより、一気に温度が下がっていく。

「くっ。ダグトリオ！ はかいこうせんだ！」

ダグトリオはあなのなかからはかいこうせんを放った。それにより、七海はダメージをおった。

「七海！ そのままあなに近づくんのだ！」

七海はダグトリオがほったあなに近づいた。ぜったいれいどにより地面が凍り、ラプラスは移動することができるようになっていた。幸いにしてあなは凍っていなかったが、中はひんやりとしていた。

「七海！ みずのはどうだ！」

七海はみずのはどうをあなの中へと入れた。

「ダグトリオ！ 地上に戻ってくるんだ！」

ヒノアラシはダグトリオがダメージを受けないよう地上に戻るよう指示をした。そして、ダグトリオは無事に地上へと戻ってきた。

「七海！ れいとうビーム！」

「トライアタックで跳ね返すんだ！」

れいとうビームとトライアタックはぶつかり合った。それにより爆風が起った。

（このままじゃ勝てない……。タイプのにも不利だし……。もう、

あれにかけるしかない……。ぜったいにいどにひけをとらないじめんタイプの大技を)

ヒノアラシはそう考えた。そう考えているうちに煙がはれ七海が攻撃態勢に入っているのを目にした。

「七海！ れいとうビームだ！」

「ダグトリオ！ かわすんだ！」

ダグトリオは地中に少しばかりもぐりれいとうビームをかわした。

「ダグトリオ！ じわれだ！」

ダグトリオはじわれを起こした。一撃必殺のじめんタイプの大技だ。

「七海！ まもるだ！」

しかし、ヒノアラシはそれに託していたが、七海のみもるで防がれてしまった。

「くっ。一体どうすれば……」

「これで決着をつけてやる！ 七海！ ダグトリオに近づくんのだ！」

七海は凍りつくされたフィールド上をダグトリオに向かって動き出した。

「そこからハイドロポンプ！」

「ダグトリオ！ かわせ！」

「七海！ 絶対にはずすなよ！ 何のために動いてるんだ！」

ダグトリオはハイドロポンプが飛んでくるであろう場所から低い場所へ重心をおろした。だが、七海は発射をせずダグトリオまで近づいていった。

「ダグトリオ！ はかいこうせんだ！」

「ハイドロポンプ発射！」

そして、至近距離へと来ていた七海に対しダグトリオははかいこうせんを発射した。

それにより、はかいこうせんとハイドロポンプはぶつかり合った。

だが、それらはすり抜けあい、二匹にあたりダメージを与えた。

「ダグトリオ！」

「七海！」

「ダグトリオ。ラプラス戦闘不能！ よってこの試合は引き分け！」

この熱戦は引き分けに終わった。試合終了後、手持ちを戻し、ヒノアラシと焰は再度握手をかわした。それを見た観客は一気に歓声をあげた。

運命を分ける第二回戦が次に始まるうとしていた。

第十七話終了第十八話に続く・・・

第18話 「国内学校別大会決勝戦 -後編-」 (前書き)

決勝戦第一試合が始まり熱戦を繰り広げたヒノアラシと焰。結果は引き分けに終わり、第二試合に持ち越されるのだった。

第18話 「国内学校別大会決勝戦 - 後編 -」

第一試合を終えたヒノアラシと入れ替わりでワニノコはフィールドへと向かった。

ワニノコが上がるとESF学校の選手はいなかったがすぐに上がってきた。それは、キルリアのミキであった。

「よろしくね」

「こちらこそ」

ワニノコとミキは、ヒノアラシと焰と同じで試合前に握手をかわした。

そして、定位置につくと審判が言った。

「それではこれより第二試合を開始します。それでは試合開始！」

「行くぜ！ カメックス！ ピジョット！」

「頼んだわよ！ サーナイトとフライゴン！」

ワニノコはカメックスとピジョット。ミキはサーナイトとフライゴンを出した。

「カメックス！ れいとうビーム！ ピジョット！ つばめがえし！」

「サーナイト！ サイコキネシス！ フライゴン！ だましうち！」

れいとうビームはフライゴンへと向かっていった。しかし、フライゴンがそれをかわしたため、当たることはなかった。それどころか、フライゴンのだましうちがカメックスにダメージを与えた。

ピジョットのつばめがえしは、サーナイトへと向かっていったのだが、サーナイトのサイコキネシスでピジョットは動きが封じられてしまった。

「ピジョット！ カメックス！ サーナイトにハイドロポンプだ！」

「サーナイト！ ピジョットをおろすのよ！」

サーナイトにハイドロポンプは向けられたが、サイコキネシスで捕らえられていたピジョットがサーナイトの前に来て、ハイドロポンプを受けた。

「なに！？ くそピジョットを盾に使いやがった」

「フライゴン！ カメックスにギガドレインよ！」

「くっ！ れいとうビームだ！」

ギガドレインはカメックスに向けられそうになったが、カメックスのれいとうビームのせいでギガドレインは発射されることはなかった。

しかし、その間にもピジョットはサイコキネシスによるダメージを受けていた。

「強い……!!」

「フライゴン！ りゅうのいぶきよー！」

「カメックス！ まもるだ！」

りゅうのいぶきはまもるで守られた。

「フライゴン！ すなじごくー！」

りゅうのいぶきを守っていたカメックスだったが、すなじごくは守ることができなかった。

カメックスはすなじごくに捕らえられ、うまく動けない状態だ。

「カメックス！ ハイドロポンプ！」

「あなをほるよー！」

フライゴンは空中から一気に地中へともぐっていった。

「ならば！ カメックス！ サーナイトにみずのはどうだ！」

フライゴンがいないためカメックスはサーナイトにみずのはどうを発射した。

「サーナイト！ テレポートで回避よー！」

サーナイトはサイコネシスを中止しテレポートでその場から離

れた。

みずのはどうは、そこにいたピジョットに当たってしまった。

「かみなりよ！」

そして、テレポートをしていたサーナイトはカメックスの裏へ来て、かみなりでカメックスを攻撃した。

「カメックス！ くそ！ ピジョット！ つばめがえし！」

ピジョットはかみなりのパワーであまり動けない状況のサーナイトにつばめがえしで攻撃をし、ダメージを与えた。

「フライゴン！ 行きなさい！」

地中にいたフライゴンはかみなりで攻撃されたカメックスに追い討ちをかけるように攻撃をした。

カメックスは足場を崩され倒れてしまった。

「！ カメックス！ れいとうビーム！」

カメックスが倒れるとちょうど目の前にフライゴンがいた。まだ、上空へと出てきていなかったのだ。

そのフライゴンに対して、れいとうビームを一気にあびせた。

「フライゴン！」

フライゴンはそれにより翼が凍ってしまった。これで、空中へ動くことはできなくなった。

「カメックス！ ハイドロカノンだ！」

「フライゴン！ かわすのよ！」

フライゴンは穴にもぐった。だが、それはハイドロカノンが絶対に当たるようにしてしまっていた。

カメックスは穴に向かいハイドロカノンを発射した。逃げ場のない穴の中ではフライゴンもそれをかわすことなどできなかった。

すると、穴からハイドロカノンの水が溢れ出しフライゴンもそれと同時に地上へと戻ってきた。

そこにいたフライゴンは力尽きており、戦闘不能となっていた。

「フライゴン戦闘不能！」

「ご苦労様。戻って、フライゴン」

ミキはそう言ってフライゴンをボールに戻した。

「どうだ！ これで二対一だぜ！」

「どづかしら？ あなたのピジョットを見てみなさいよ」

二対一になり有利になったと思ったワニノコだったが、ミキに言われピジョットを見てみた。

すると、ピジヨットはサーナイトのサイコネシスで動きが封じ込められており、また、弱っていた。

「サーナイト！ かみなり！」

そして、サーナイトはサイコネシスを解き、かみなりをピジヨットに当てた。

これによりピジヨットは戦闘不能となってしまうた。

「ピジヨット戦闘不能！」

「な！？ 戻れピジヨット！」

ワニノコはピジヨットをボールに戻した。

「どっつ？ これで一対一よ」

「だからなんだ！ 俺にはカメックスがついてる！ れいとうビームだ！」

カメックスはサーナイトに向けてれいとうビームを放った。しかし、サーナイトはそれをテレポートでかわした。

「サイコネシス！」

「まもるだ！」

テレポートでカメックスの後ろに移動したサーナイトはサイコキ

ネシスでカメックスの動きを止めようとしたが、カメックスはそれをまもるで守った。

「アイアンテールだ！」

サイコネシスが終了したと同時にまもるを解き、アイアンテールをサーナイトにおみまいした。

「かみなりよ！」

アイアンテールをしたカメックスにかみなりは放たれた。

だが、かみなりの動作が大きいため、間一髪でかわすことができた。

「かみつくだ！ カメックス！」

「サーナイト！ テレポート！」

サーナイトにかみつこうとしたカメックスだったがテレポートでかわされてしまった。

「サイコネシス！」

再度カメックスの後ろに回ったサーナイトはサイコネシスでカメックスを捕らえた。

サイコネシスで捕らえられたカメックスは身動きができない。

「カメックス！」

「サーナイト！ かみなり！」

「まもるだ！ カメックス！」

サーナイトはサイコネシスを解きかみなりを放った。

カメックスはそれに対し、まもるでかみなりを防いだ。

「かげぶんしんよ！ サーナイト！」

サーナイトはかげぶんしんをし、カメックスを取り囲んだ。カメックスはそれに対して動揺をしている。

「くつまもるは使えない……。どうすればいい……」

ワニノコはその後になにが来るかは大体わかっていた。だが、それを防ぐ作戦が思い浮かばない。

「さあ止めよ！ かみなり！」

サーナイトのぶんしんはいつせいにかみなりを放ってきた。

「こうなりやーか八かだ！ まもる！」

ワニノコは賭けに出た。まもるは連続で出せば失敗しやすいが成功することもある。その成功にかけたのだ。

そして、かみなりはついにカメックスに直撃をした。

ワニノコはそれをよく見ていた。すると、そこには無事なカメックスの姿があった。まもるが成功したのだ。

「なんてこと！？ でももう一発よ！」

「させるかよ！ カメックス！ こうそくスピンからハイドロポンプだぜ！」

ぶんしんサーナイトがかみなりを放つまでの短い時間の中で、カメックスはこうそくスピンをしながらハイドロポンプを放ち始めた。水が周りにいきわたり無数のぶんしんもそれによって、消えていった。そして、本物にも当たった。

「そんな！？」

「今だ！ ハイドロカノン！」

ハイドロポンプに当たったサーナイトは予想だにしないダメージだったため、少しの間動くことができなかった。

そんな時にハイドロカノンがサーナイトに向かって放たれたため、サーナイトはハイドロカノンをかわすことができなかった。

そして、サーナイトはその場に倒れてしまった。

「サーナイト戦闘不能！ よって勝者はセント学校！」

「や、やった……！ やったぜ！」

観客が一気に沸きあがった。そう、セント学校は優勝したのだ。

ワニノコはフィールド上を思いっきり駆け下り仲間達のところへと向かった。

そして、セント学校の選手全員で優勝を喜び合ったのだった。

一方ミキのほうはゆっくりとフィールド上から降りていた。

そして、ミキの仲間達に慰められ、負けの味を飲み込むのだった。

こうして国内学校別大会決勝戦は幕をおろすのだった。

第十八話終了第十九話に続く・・・

第19話 「世界への幕開け」(前書き)

決勝戦第二試合を戦ったワニノコとミキ。決死の戦いの末、ワニノコが勝利しセント学校在優勝するのだった。

第19話 「世界への幕開け」

「それでは大会理事長より記念のトロフィーと賞状、メダルを授与します」

決勝戦が終わり、セント学校の選手達は国内学校別大会理事長より記念品を贈呈されていた。

理事長であるメタングは一人一人にメダルを掲げていった。

準優勝であるESF学校の選手達にもメダルは授与された。

そして、一通り渡し終わると理事長からの話が始まった。

「皆さんおめでとう。いくつもの激しい戦いを勝ち抜きよくここまで来ましたね。さて、ここで皆さんによりお知らせがあります。優勝校であるセント学校には、数カ月後に”スクールオブワールドチャンピオンシップ”という大会が開催されます。そこで、その大会に出場をしてもらいたいです」

「わ、ワールド!？」

ワニノコは驚いた。いや、ワニノコだけでなく他の選手達も驚いただろう。

「この大会に参加するかしないかのご連絡は後日お願いいたします。選手達の希望により行くか行かないかを決めてください」

授与式が終わり、今度は閉会式が行われた。

セント学校も閉会式には出場していた。だが、その間にワニコはずっとスクールオブワールドチャンピオンシップについてを考えていた。

自分達が世界の場合へと出ることが出来る。それは素晴らしいことであり、自分の実力をよく試すことも出来る。

しかし、その一方ですぐに負けてしまうということがありえることを考えると恐ろしかった。

期待されながらすぐに負けてしまうのは一生の恥である。

そんなことを考えながらも閉会式が終わり、ホテルへと戻った。

セントタウンへと帰るのは明後日で明日は一日自由時間ということになっていた。

校長の話によれば、明日の夜にミーティングをするので、そのときにスクールオブワールドチャンピオンシップに行きたいかどうかの意思確認をするとのことだった。

そして、ミーティングが行われる日の昼。ワニコたちは自分達の部屋にいた。

「どうしようかな……。スクールオブワールドチャンピオンシップ……」

「どうしたのよワニコ？　あなたらしくないじゃない。戦いに関しては何でもやるって言う性格だったのに」

「だって、世界だぜ？ 世界の敵とは戦っては見たいけど、期待されながらまけたら恥だぜ。恥になるぐらいなら行かないほうがいいじゃないか」

「ワニノコにしては珍しいね。負けることを考えるなんて。大体は勝気まんまなのに」

「そんなこと言われても今回ばかりは……。ところでお前らはどうなんだよ？」

「とりあえず、校長の話によれば旅費は負担されるということだから私は行くつもり」

「僕も行く予定だよ。世界ってというのがどれくらいのものか見てみたと思ってさ」

「二人とも決断が早いな。だけど、俺の悩みを持ってはいないみたいだな」

「その悩みはワニノコにとってはめったにない悩みだわ。たまにはゆっくり考えてごらんさい。たまにはそう言うこともあっていいと思うわ」

その日の晩。ワニノコたちは予定通り校長の部屋へと足を運んだ。

「よし全員そろったな」

五人のセント学校の一つの部屋に集結したところで校長は言った。

「それでは意思確認をしたいと思う。スクールオブワールドチャンピオンシップに出場したいものは拳手してくれ」

校長がそう言うと、五年の三人は拳手し六年の二人は拳手をしなかつた。

「先輩？　どうかしたんですか？」

「どうもしないよ」

「でも手を挙げてないじゃないですか？」

「ぼくは行かないことにしたよ」

「おれもだ」

五年の三人はそれを聞き驚いたため質問をさらに続けた。

「一体どうしてですか？　せつかく世界の舞台に立つことができるのに……」

「ぼくは自分の力の弱さを知った。準決勝のゲンガー戦でね。そして、ぼくはその試合を最後にし公の戦いにはでることはやめようと決心したんだ。だから、世界の場に立つことなんて考えられない」

「おれも同意見さ。今の自分の力で世界へ行っても悔しい思いをするだけ。なら行くだけ無駄さ」

「でも、まだ数ヶ月あるから練習さえすれば……」

「ぼくはそう言うわけには行かないのさ。ぼくは受験をしないといけないからね」

「先輩は私立に行くんですか？」

チコリータが聞いた。するとライチユウは言った。

「うん。受験勉強もそろそろしないといけないからこの大会に出るのも少しためらうところも少しあったほどだ」

「おれは短期間で強くなるうとは思わない。長い経験が自分を強くするものだと思ってる。だから、短期間で力をつけようなんてやる気なんてしないさ」

「そうですね……。先輩達がいなくなると寂しくなりますね……」

「そんなことを言うなよワニノコ。まだ会おうと思えば会えるんだ。ただ、世界の場に一緒に行けないだから」

「話しはまとまったな」

校長がそう言った。

「我が校からはワニノコ。ヒノアラシ。チコリータの三人だけが出場するということでもいいのだな？」

「はい」

「わかった。ならば、これで手続きを済ませます。じゃ、今日はこれに

て解散。明日は十時にこの部屋に集合だ。遅れるなよ」

次の日の朝にワニノコたちは約束どおり十時に校長の部屋へと集まり、船乗り場へと向かった。

そして、船に乗り込みセントタウンへと戻るのだった。

こうして、国内学校別大会は幕を完全に閉じるのだった。その代わり、スクールオブワールドチャンピオンシップの幕が開いた。

町につくと選手達は学校へと向かった。学校に人が待っていると
いうのだ。

学校に着くとそこにはたくさんの方がおり、選手達は暖かい歓声
に包まれ祝された。

それから数日がたった休日最終日のことだった。

ワニノコたちは国内学校別大会の疲れを癒すため数日間の休日を
与えられ休んでいた。

そんな休日の最終日にワニノコの家には誰かが訪問してきたのだっ
た。

ワニノコはドアを開けた。するとそこにはアメモースがいた。

「こちらはワニノコさんのお宅でしょうか？」

アメモースは聞いてきた。

「そうですね、あなたはどちらさんですか？」

「私はアメモと申します。スクールオブワールドチャンピオンシップに関することができました」

「スクールオブワールドチャンピオンシップに関すること？」

「はい。ところであなたがワニノコさんですか？」

「あ、はい。そうです」

「あのあなたの学校でスクールオブワールドチャンピオンシップに出場する選手の方々を紹介していただけませんか？」

「はあ、別にいいですよ」

ワニノコはまずはヒノアラシの家に行ってからチコリータの家へ行った。

それからアメモに学校へ行くように言われたので学校へ向かい校長と会うこととなった。

「始めまして。私はアメモと申します」

「始めまして。話しは聞いていますよ。スクールオブワールドチャンピオンシップに出場するんだってね」

「え！？ どういうことですか？ 校長先生？」

「スクールオブワールドチャンピオンシップに出場するには最低四

人の選手が必要なんだ。だが、我が校からは知ってのとおり三人しかいない。だから、あと一人の補充要員としてアメモ君が来てくれたのだ」

「後で言おうと思っていたんですけど、先に言われちゃいましたね。校長先生の話にあつたように私は補充要員として来ました。出身学校はESF学校です」

「ESF学校？　そういえば選手の観戦場所にアメモースがいたよ
うな気が……」

ワニノコはそうつぶやいた。するとアメモは言った。

「たぶんそれが私です。決勝戦には出場しませんでしたから。ミキさんと焰さんが活躍してくれましたからね」

「それではアメモ君にこの辺の土地を教えてあげてくれたまえ。何かと知っておいたほうが便利だろう」

ワニノコたちはアメモにセントタウンの土地を教えてあげるよう指示されたため、教えてあげた。

そして、最終的にはアメモの宿泊する旅館でワニノコたちは別れ、この日を終えた。

こうして新たな仲間を加えスクールオブワールドチャンピオンシップへと望むのである。

第十九話終了第二十話に続く……

第20話 「開催直前」(前書き)

国内学校別大会が終わり、次の大会であるスクールオブワールドチャンピオンシップへ向けているとき、新しい仲間、アメモが加わるのだった。

第20話 「開催直前」

国内学校別大会の休日も終わり、学校へと向かったワニノコたち。

その日からワニノコたちは放課後になると、スクールオブワールドチャンピオンシップのための練習を始めるのだった。

相手は世界の人々。今の自分達の力ではダメだと思ったのである。いや、さらに力をつけスクールオブワールドチャンピオンシップに望もうという気持ちからかもしれない。

それから、数ヶ月がたちスクールオブワールドチャンピオンシップが開催される十日前の日にワニノコたちは世界へとびたつた。

そう、ついにスクールオブワールドチャンピオンシップが開催される時期となったのだ。

その時期にはすでに桜が咲く時期となっており、ライチュウやタツベイは卒業をしていつてしまっていた。

「ああ、もうこんな時期か」

スクールオブワールドチャンピオンシップが開催される地「ルーヴロシティ」へと向かっているフェリーの部屋の中でワニノコはつぶやいた。

「そうだよ。校内大会をやっていた時と国内学校別大会のときは冬だったのに今じゃもう春だもんね」

「ああ。ライチュウさんとタツベイさんも卒業して行つたし、俺たちもそろそろ六年になるんだもんなあ」

「うん。でも、この時期ならライチュウさんだって、大会に参加できたのにね。受験は終わっただろうしさ」

「そつだな。まあ、ライチュウさんにも考えがあったのさ。ところで、甲板にでも行くか」

「嫌だ」

「即答かよ……。何で嫌なのさ。別に落ちるわけじゃないだろ」

「でももし落ちたら怖いしさ……」

「いざとなつたらリザードンを出して、助けてもらえばいいじゃんか」

「そんな瞬時に出せないよ……」

「大丈夫だって、さあ行くぜ」

ワニノコはヒノアラシを引っ張りながら甲板へと向かった。

甲板に着くとそこには、数人の乗客がいただけで、ほぼがら空きだった。

「ほら、別に問題ないだろ」

ワニノコはヒノアラシをつかみながら甲板の一番先端へと向かっ

た。

そして、ヒノアラシに海を見せてあげたのだ。

「問題ないけど……やっぱり怖いよ……」

「相変わらず臆病な奴だな」

「どうでもいいけど、早く僕をそっちに戻してよ……」

ヒノアラシにそう言われワニノコは手を引きヒノアラシを甲板の板の上に乗せた。

「たく、ヒノアラシの性格は相変わらず変わらないんだ……」

「そんなに性格なんて変わるわけがないじゃないか。あれ？ あれ、チコリータとアメモじゃない？」

ヒノアラシがそう言つとワニノコはあたりを見回した。すると、そこにはチコリータとアメモが海を眺めていた。

「なにをしているんだ？」

ワニノコとヒノアラシは二人に近づき話しかけた。

「あ、ワニノコとヒノアラシ。なにしてるって、ただ海を見ているだけよ」

「まあ、そうだろうな。それ以外やることないし」

「だったら聞かないですよ。ところで、あなたたちは何をしているの？」

「暇だったから甲板に來ただけさ。まあ、ヒノアラシは無理やり俺がこさせたんだけどね」

「無理やりという何かあったんですか？」

ここでアメモがワニノコに聞いた。

「何かあったというか、アメモも知っている通りヒノアラシは臆病な性格だからな。海が恐くてここまでこれないんだよ」

「だって海は水の山だし……ほのおタイプの僕が落ちたら……」

「大丈夫ですよ、ヒノアラシさん。落ちてもワニノコさんという心強い仲間がいるんですから助けてくれますよ。一時の恐怖だけで済むんですから」

「その一時の恐怖が嫌なんだけど……」

「誰だって恐怖は体験するものですよ。そう言う体験は今後役に立つと思いますよ」

「そうかなあ……」

「そうですね。とりあえず一人で海を見ることができるようになるくらいにはなったほうが良いと思いますよ」

それからワニノコたちはいろいろと船内を見て回った。その晩に

はルーウドシティに到着しなかったので、船内の部屋で一泊した。

部屋割りは、ワニノコとヒノアラシの部屋とチコリータとアメモの部屋という性別で分けられた部屋割りである。

次の日の昼ごろに船はルーウドシティの港へと到着した。

港からは送迎バスが来ていたため、それに乗りホテルへと向かった。

ルーウドシティは、世界大会をするために作られた街であるため、さまざまな言語の広告があり、いろんな国の人がいる街だった。

街には高層ビルが数個建っており、灰色一色に染まったような街である。

田舎の町であるセントタウンに住んでいる彼らにとっては国内学
校別大会以来の光景だ。

そして、アメモにとっても、ESF学校があるエンセルトシティ
の街以来の光景であった。

ホテルに着くと、船の時と同じ部屋割りだった。

そして、その晩に校長の部屋でミーティングが行われた。

「スクールオブワールドチャンピオンシップが九日後に開催される。
そこで、少し早いがルールの説明をしようと思う」

ここで校長はテーブルの上にある紙を取り再度話し始めた。

「スクールオブワールドチャンピオンシップでは、国内学校別大会と同じく予選リーグが開催される。予選リーグでは、タッグバトルを一試合行いその試合で勝ったほうが勝利となる」

「それで一体リーグ戦は何試合するんですか？」

「参加国数が、三十校と少ないため一リーグ四校の学校が六個。三校のリーグが二個だ。我が校は四校のリーグである、Bブロックだ」

「それだけですか」

「そうだ。とりあえず、ルールは難しく言わなければこれだけだ。頭に入れることなどほとんどないがちゃんと忘れないようにするよ。うに。では、今日のところはここら辺で終わるとしよう。各自部屋に戻りたまえ」

次の日。ワニノコたちは、街を見学しつついでお土産も買った。

そして、練習ができそうな場所を探し、やっとの思いで発見した。そこは、ホテルの近くにあった。

それから時はたちスクールオブワールドチャンピオンシップ開催前日。

ワニノコたち四人は発見した練習ができそうな場所で練習をしていたときだった。

「ここでなにをしているんだ！」

そう言ってきたのはグラエナだった。後ろには、ノクタス・ブー
ピッグ・ザングースがいる。

「なにつて、バトルの練習を……」

「ここはおれたちの領土だ！ お前らなんかに使われてたまるかよ
！」

「領土つて、お前、ここは誰のものでもないはずだろ！ お前達が
この場所の土地を持っているつて言うのか？」

「黙れ！ ここはおれたちが先に練習場として使っていたんだ。お
前らなんかに使わせるわけにはいかねえ！」

「なんだと！」

「なんだよ！」

「ちょっと、やめなさい」

ワニノコとグラエナがけんかをしそうになっているのをチコリー
タはとめた。

「チコリータは黙ってる。俺が決着をつけてやる」

「待ちなさいよ、ワニノコ。こんなところでそんなことをしてなに
になるつて言うの」

「ほう、決着をつけるか。ならいいだろう。ポケモンバトルで決着
をつけようじゃねえか」

「いいぜ。受けて立ってやる！」

「ちょっと待ちなさい！」

チコリータは大声で言った。

その時、後ろのノクタスが言った。

「ハイエッドやめろ。こんなところでポケモンを痛めつけてどうする」

「だがキャクナル。おれらの領土をあらされてなんとも思わねえのか？」

「思うがこんなところで争っている暇などないというのだ」

「チツ。しかたなえ。いいかお前ら。今回は見逃してやるがこんど会った時は承知しねえからな。行くぞ、キャクナル。ピッド。グツカット」

ハイエッドと呼ばれたグラエナはそう言ってワニノコたちを置いていきどこかに行ってしまった。

「くそ。逃げられた。チコリータが余計なことを言うから」

「あのキャクナルとかいったノクタスの言つとおり私たちもポケモンを痛めつけるわけには行かないわ。明日は試合なのよ」

「そういえば試合だったね。もしかしたら、あの人たちも参加者だ

ったのかな？」

「その可能性は高いですね。でも、今は考えてばかりはいられませんが、ホテルへ帰りましょう。ここで、練習をしていると面倒なことになりますから」

アメモのその一言でワニノコたちはホテルへと戻ることとなった。

ハイエツド。キャクナル。ピッド。グツカット。彼らは一体何者だったのか。

スクールオブワールドチャンピオンシップの幕が静かに開けようとしていた。

第二十話終了第二十一話に続く……

第21話 「スクールオブワールドチャンピオンシップ開幕！」（前書き）

スクールオブワールドチャンピオンシップが開催される地ルーフ
ドシティへと来たワニノコたち。そこで、謎の四人組と出会う。

第21話 「スクールオブワールドチャンピオンシップ開幕！」

ついにスクールオブワールドチャンピオンシップが開催されることとなった。

ワニノコたちセント学校とESF学校のアメモのタッグを組んだチームでスクールオブワールドチャンピオンシップに望むこととなる。

彼らは、開会式が行われる時間までに会場へと到着し開会式に参加した。

開会式では入場行進。ルール説明などを行った。

開会式が終わると、ワニノコたちは別会場へと移動し、その日のバトルへと望むこととなった。

「俺たちの相手は誰だ？」

移動中にワニノコはチコリータに聞いた。

「ラグナススクールよ。私たちが参加しているBブロックには、私たちとラグナススクールのほかに、ライデント学校とリンジングスクールよ」

「なんかわけのわからない名前の学校ばかりだね……」

それを聞いていたヒノアラシが言った。

「まあね。ライデント学校以外は全部私立だしね」

「そうなんですか？」

「ええ。スクールがついている学校は私立よ。さぞかし強いんでしょうね」

「そう言うことよ」

会場に着くと、セント学校対ラグナスクールの試合が開始された。

その試合には、チコリータとアメモが参加した。

相手は、ケーシィとラルトスのタッグだ。

「それではこれよりセント学校対ラグナスクールによる試合を始めます。それでは試合開始！」

審判であるハッサムがそう言うと両者ともポケモンを出した。

「行くのよ！ フシギバナ！」

「頼みましたよ！ ハーフリー！」

「ブースター……」

「シャワーズがんばって！」

チコリータはフシギバナ。アメモはアゲハントのハーフリー。ケーシィはブースター。ラルトスはシャワーズを出してきた。

「フシギバナ！ はっぱカッター！」

「ハーフリー！ ぎんいろのかげです！」

「……」

「シャワーズ！ れいとうビームよ！」

フシギバナのはっぱカッターとハーフリーのぎんいろのかげはシャワーズに向かっていった。

一方シャワーズのれいとうビームははっぱカッターを凍らせ数個落とさせた。ブースターはかえんほうしゃを放ってきた。

それにより、少量のぎんいろのかげのみがシャワーズへと当たった。

「どうやらあのブースターはケーシィのテレパシーにより指令を出されているみたいね」

「そうですね。声が聞こえないと対応のしようがありません。ここは、一気にたたみかけます。ハーフリー！ サイコネシスです！」

「なら私はシャワーズをやるわ！ フシギバナ！ つるのムチ！」

「シャワーズ！ れいとうビーム！」

「……」

ハーフリーのサイコネシスはブースターに直撃した。ブースターはその状態からかえんほうしゃをフシギバナに放ってきた。

そのかえんほうしゃが来る前にフシギバナはつるのムチでシャワーズを攻撃した。

だが、攻撃と同時にシャワーズのれいとうビームがフシギバナに直撃した。

「ハーフリー！ ぎんいろのかぜ！」

それを見たアメモはぎんいろのかぜでシャワーズに攻撃をした。無論、ブースターへの攻撃は中止のことだ。

だが、シャワーズはその攻撃をかわした。

「そんな……！」

「シャワーズ！ れいとうビーム！」

「……」

攻撃をかわしたシャワーズはれいとうビームをフシギバナへと攻撃してきた。

そして、ブースターもかえんほうしゃでフシギバナを攻撃してきた。

「フシギバナ！ ハードプラント！」

フシギバナは、ハードプラントでかえんほうしゃをれいとうビームを防ぎながら二匹に攻撃を仕掛けた。

だが、攻撃の残骸がフシギバナを襲った。

シャワーズは大ダメージを受けた。ブースターにはあまりきいていない。

「れいとうビーム！」

「……」

シャワーズとブースターは体勢が整うと再度動けないフシギバナを攻撃してきた。

「ハーフリーー！ サイコキネシス！」

二つの攻撃はハーフリーーのサイコキネシスであたりそうになった時に勢いをとめた。

「あ、ありがとう。アメモ」

「どういたしました。さあ、次の攻撃に行きましょう」

「ええ！ フシギバナ！ はっぱカッター！」

「ハーフリーー！ ぎんいろのかぜです！」

フシギバナのはっぱカッターはシャワーズへ。ぎんいろのかぜはブースターへ飛んでいった。

だが、シャワーズはれいとうビームで。ブースターはかえんほうしゃでぎんいろのかぜをとめた。

「そんな！」

「シャワーズ！ ふぶき！」

「……」

シャワーズはふぶきで、フシギバナとハーフリーに。ブースターはかえんほうしゃより強いだいもんじで攻撃してきた。

まず、フシギバナとハーフリーはふぶきで逃げ場を失いながらもダメージを受けた。

そして、だいもんじでフシギバナを攻撃し、残り火をふぶきに付着させた。

その付着火でフシギバナを攻撃した。

もともとダメージを多めに受けていたフシギバナだったため、その付着火によってダメージを受けただけで戦闘不能になってしまった。

そして、ハーフリーも、ふぶきによるダメージと付着火によるダメージを受けたため、体力が一気に削られてしまい戦闘不能となってしまった。

「フシギバナ、アゲハント戦闘不能！ よって、ラグナスクールの

勝ち！」

「そ、そんなあ……」

ワニノコたちは選手控え室へと戻った。そして、次の試合への準備や休憩を行うのだ。

だが、休憩を行える状態ではなかった。チコリータとアメモの気持ちは沈んでしまっているのだ。

そう、試合で勝つことができなかったという責任感から。

ワニノコとヒノアラシは彼女らに慰めの言葉をかけた。そして、自分達が次の試合で勝つてやると意気込むのであった。

そして、大会スタッフがやってきたので、ワニノコたちは試合会場へと向かった。

その途中で、見覚えがある少年達と思わぬ再会を果たした。

「お前は！」

「まさか、お前らが大会の参加者だったとはな。まあいい。ラグナスクールごときに負けるお前からセント学校など俺たちのリンジングスクールが簡単に倒してやるぜ」

「ハイエツド！ 絶対俺らは負けない！ 絶対に勝つてやる！」

「ふん！ そんなことなどできるか。おれとキャクナルの力にかかれば簡単に倒せるのさ」

一試合目は負けてしまったセント学校。そして、二試合目も強豪
リッジングスクール。一体、セント学校は決勝トーナメントへと進
出できるのだろうか。

第二十一話終了第二十二話に続く……

第22話 「第二試合の結末」(前書き)

スクールオブワールドチャンピオンシップ第一試合を負けしてしまったセント学校。そして、第二試合の相手がハイエツドたちの学校であることを知り闘争心を燃やすワニノコだった。

第22話 「第二試合の結末」

「それではこれよりセント学校対リンジングスクールの試合を開始します」

「さあ行くぜ！ ヒノアラシ！」

「うん！」

「それでは試合開始！」

審判のハッサムがそう言うと試合が開始された。

「行け！ カメックス！」

「行くんだ！ リザードン！」

「行きな！ ブラッキー！」

「キノガッサ行け！」

ワニノコはカメックス。ヒノアラシはリザードン。グラエナのハイエッドはブラッキー。ノクタスのキャクナルはキノガッサを出してきた。

「先手必勝だぜ！ カメックス！ ハイドロポンプ！」

「リザードン！ かえんほうしゃ！」

ハイドロポンプはブラッキーに。かえんほうしゃはキノガッサへと向かっていった。

だが、二つのわざはかわされてしまった。

「そんなもんか。ブラッキー！ だましうち！」

「キノガッサ！ マツハパンチ！」

ハイドロポンプとかえんほうしゃをかわした二匹はだましうちでリザードンを。マツハパンチでカメックスを攻撃した。

両方のわざはちゃんと目的の相手にダメージを与えた。

「カメックス！ れいとうビーム！」

「リザードンはかえんほうしゃだ！」

カメックスとリザードンは同じ相手。キノガッサへと攻撃を仕掛けた。

しかし、キノガッサはその身の軽さで両方のわざをかわした。

「単調すぎるな。よくそんな実力でここまでこれたものだ。しよせん、たいした実力ではない大会で優勝したのだから」

「だろうな。こいつらじゃつまらねえ。とつとつ、やっちまおうぜ、キヤクナル」

「そんなことさせるか！ 俺たちの攻撃を受けてみる！ カメック

ス！ ハイドロポンプだ！」

「リザードン！ だいもんじー！」

ハイドロポンプはブラッキーに。だいもんじはキノガッサへと向かっていった。

二匹は先ほどのようにかわした。しかし、少しばかりかすった。

「む？」

「どうしたキャクナル？」

「いや、なんでもない。それより行くぞ！ キノガッサ！ ギガドレイン！」

「ブラッキー！ もう一度だましうち！」

「カメックス！ まもる！」

「リザードン！ かえんほうしゃで迎え撃つんだ！」

キノガッサのギガドレインをカメックスはまもるで守った。

リザードンはブラッキーに攻撃をされながらも、かえんほうしゃでダメージを与えた。

「な！」

「リザードン！ ドラゴンクロー！」

リザードンは続けてドラゴンクローでブラッキーを攻撃した。再度ダメージを与えるのだった。

「ブラッキー！ シャドーボール！」

「キノガツサ！ スカイアッパー！」

「カメックス！ れいとうビームだ！」

ブラッキーはリザードンにシャドーボールで攻撃した。ドラゴンクローで接近していたためかわすことができなかった。

カメックスは迫り来るキノガツサに向かってれいとうビームを発射したが、当たらずキノガツサのスカイアッパーを受けてしまった。攻撃をし終わると、ブラッキーとキノガツサは、最初に出た場所に帰っていった。

「なあ、急に奴らが強くなった気がしねえか？」

ハイエッドがキヤクナルに聞いた。

「確かに。だが、我々が負けるほどの強さではない」

「だな……。よし！ やってやるぜ！ ブラッキー！ シャドーボール！」

「カメックス！ ハイドロポンプ！」

ブラッキーのシャドーボールはリザードンに向かっていったのだが、カメックスがそれをはじき返した。

「よし！ リザードン！ かえんほうしゃー！」

「キノガッサ！ マツハパンチ！」

「させるか！ カメックス！ 地面に向かってれいとうビームだ！」

キノガッサに対しかえんほうしゃを放ったりリザードンだったが、マツハパンチにかわさせそうになった。

しかし、れいとうビームにより地面が凍ったためキノガッサの足元が崩れマツハパンチが途切れてしまった。

「今だ！ ヒノアラシ！」

「うん！ リザードン！ ブラストバーン！」

動きが止まったキノガッサに対しリザードンはブラストバーンを発射した。

キノガッサは逃げることもできずブラストバーンのダメージを受け、戦闘不能となってしまった。

「キノガッサ戦闘不能！」

審判が言った。

「くっ、戻れキノガッサ」

「きゃ、キヤクナル？」

「悪い負けてしまった。後は頼んだぞ、ハイエツド」

「ああ、それはいいが奴ら……」

「奴らの潜在能力が表に表れだしたのかもしれない。気をつけろ、ハイエツド」

「さあ、行くぜ！ カメックス！ ハイドロポンプ！」

「さあ、行け！ ハイエツド！」

「おうよ！ ブラッキーかげぶんしん！」

カメックスのハイドロポンプはかげぶんしんによってかわされてしまった。

「あわ攻撃で分身に攻撃だ！」

カメックスはあわを放った。数多いあわ攻撃で特定しようというのだ。

「あまい！ シャドーボール！」

ブラッキーの分身が解けた。本物の位置はリザードンの後ろだ。

「しまったー！」

ワニノコはやってしまったと思った。ブラストバーンを放つたりザードンは動けない。その状態をつかれてしまったのだ。

ブラッキーのシャドーボールは乱れうちのように発射された。その攻撃によりリザードンは一気に体力を削られ、最終的に戦闘不能へと追い込まれた。

「リザードン戦闘不能！」

再度審判が言った。

「戻るんだ、リザードン。ご苦労様」

「ごめんヒノアラシ。リザードンを守りきれなかった」

「いいんだよ。リザードンだってキノガッサを倒したんだ。それだけでいいと思っているよ。さあ、がんばってワニノコ！」

「わかった」

ワニノコはそう言われると前を向いた。すると、そこではブラッキーがツキのひかりで体力を回復しているではないか。

「さあ、バトル再開と行こうか！」

ハイエツドが言った。

「行くぜ！ カメックス！ ハイドロポンプ！」

「ブラッキーかげぶんしん！」

ハイドロポンプは先ほどのようにかげぶんしんでかわされてしまった。

ワニノコは再度あわを指示し分身を探り当てようと始めた。

「ぶん！ そんな攻撃で特定などできるか！ シャドーボール！」

分身が解けた。今度もカメックスの後ろへと本物が現れた。

そして、シャドーボールを放ってきた。

「からにこもるだ！」

だが、カメックスがからにこもるでからにこもったためシャドーボールではあまりダメージを与えることができなかった。

「れいとうビームだ！ カメックス！」

「かわせ！ ブラッキー！」

カメックスはからから出てブラッキーにれいとうビームを放った。

だが、それはあたらなかったが、先ほどのキノガッサのようにブラッキーは足を滑らせた。元から、足元を狙いれいとうビームを放ったのだ。

「なに！？」

「行け！ カメックス！ ハイドロカノン！」

カメックスはここで一気にハイドロカノンを放った。勢いあるハイドロカノンはブラッキーめがけて一直線だ。

ブラッキーはハイドロカノンを受けた。巨大な水圧にブラッキーは当たったのだ。

そして、ハイドロカノンが終わり水に埋もれていたブラッキーの姿が現れた時にはワニノコは絶句した。

ブラッキーはハイドロカノンを受けたにもかかわらず倒れていないのだ。改心の力を受けたわざを受けたのにもかかわらずに。

「よく絶えたぞブラッキー！ さあとどめをさすんだ！ はかいこうせん！」

ブラッキーは最後の力を振り絞りはかいこうせんを発射した。

動けないカメックスにはかいこうせんは当たり前のように当たった。

そのはかいこうせんでカメックスは戦闘不能となってしまうた。

「カメックス戦闘不能！ よって、リンジングスクールの勝ち」

「そ、そんなあ……」

リンジングスクールとの戦いに敗北してしまったワニノコたち。
○勝二敗となってしまったのだった。

第二十一話終了第二十二話に続く……

第23話 「終結」(前書き)

第二試合を迎えたセント学校。だが、その第二試合でも負けてしまい〇勝二敗となってしまうのだった。

第23話 「終結」

○勝二敗となってしまうたセント学校の決勝トーナメント出場はなくなってしまうた。

なぜならば、リンジングスクールの勝敗は二勝〇敗。セント学校は〇勝二敗。残りは共に一試合しか残っていないため、どうあがいても決勝トーナメントに行くことなどできないのだ。

ワニノコたちは控え室で悲しみにくれた。その中で一番悲しんでいたのは女性陣だった。

チコリータとアメモは涙を流し、悲しみにくれていたのだ。せつかく来たこの大会の決勝トーナメントに行くことができなかったのだ。

ワニノコとヒノアラシは自分達の悲しみも残ってはいるが、彼女らを慰めたのだった。

それから、最後の試合である第三試合が行われた。

第三試合の相手はライデント学校だった。その試合にはワニノコとチコリータが出場した。

ライデント学校は、ほかの二校よりも弱かった。だが、油断してしまえば負けてしまいそうだった。

しかし、油断をせず戦ったのでこの試合には勝利し、セント学校の予選リーグの勝敗は一勝二敗となったのだった。

第三試合が終わると、ワニノコたちは控え室でホテルへと戻る準備を始めた。

すると、控え室に誰かが訪ねてきた。

ワニノコがドアを開けるとそこには、ハイエッドとキャクナル、ピッド、グツカットが立っていた。

「お前達は……」

「どうやら、ライデント学校には勝ったようだな」

「ああ……」

「ライデント学校に負けるようではたいした学校ではないということになるな」

そう言ったのは、ザングースのグツカットだった。

「確かにね。でも、勝ったんだからいいんじゃない」

今度そう言ったのは、ブーピッグのピッグだった。

「なにが言いたいんだ？」

話しの糸が見えないワニノコはそう言った。

「今行った話しはまったく関係ねえ。おれたちは礼を言いに来たんだ」

「礼？」

「そうだ。第二試合でおれを本気にしてくれたな」

「本気にさせた？」

「そうだ。お前らはわたし達を本気にさせたのだ。わたしたちを本気にさせるとはなかなかの実力だ」

「だからって別にお礼なんて……」

「礼だけじゃねえんだ。あやまりたいということもあるのさ。こないだの場所でのけんかの件はすまなかった」

「いいよ。俺だってつい言ってしまったこともあるし。俺のほうこそごめん」

「本当にすまなかったな。それじゃあ、おれたちはこれで」

「決勝トーナメントに出場するんだろ？ がんばれよ！」

「ああ。お前達の方も勝ってやるよ」

ハイエッドはそう言うとその場から離れていった。

こうして、ワニノコたちセント学校のスクールオブワールドチャンピオンシップは終結を迎えた。

その後、ワニノコたちは故郷セントタウンへ。アメモはエンセル

トシテイへと帰っていった。

スクールオブワールドチャンピオンシップの決勝戦には、リンジングスクールが参加した。

その試合で、リンジングスクールは勝利し見事スクールオブワールドチャンピオンシップで優勝を果たしたのだった。

その時ワニノコたちが知ったのが、リンジングスクールが、スクールオブワールドチャンピオンシップ開催地にある学校だったということだった。

決勝戦が終わり、スクールオブワールドチャンピオンシップが閉会した時、アメモを除く三人は、いつものセントタウン郊外の草原へと来ていた。

「ああ、スクールオブワールドチャンピオンシップもついに終わるか」

「そうだね。優勝は、あのリンジングスクールだったね」

「そうね。優勝候補と当たっちゃうんなんで運が悪かったわよね」

「仕方ないさ。スクールオブワールドチャンピオンシップに行けただけいいと思わないとな」

そう話していると、後ろから声が聞こえた。彼らは後ろを振り向いた。

「よお、ワニノコ。ヒノアラシ。チコリータ」

「先輩！」

そうそこにいたのは、国内学校別大会で一緒に戦ったタツベイとライチュウだった。

「どうしたんですか先輩？　こんなところへ二人そろって」

「お前達がいるとしたらここだと思ってきたのさ。よくここで練習をしていたからな。スクールオブチャンピオンシップは惜しかったな」

「惜しくはなかったです。私たちはぼろぼろでしたから」

「そんなことはなかったさ。みんなはがんばったよ。ただ、他の学校がさらに上をいっていただけさ。まだ、国内学校別大会に出場する権利はまた取れる。取れそうだったらがんばってね。ぼくたちは応援しているよ」

「ありがとうございます、先輩」

「それじゃあ、いくとするかタツベイ。ぼくたちはそれを言いたかっただけだからね」

「先輩！」

ライチュウとタツベイがその場を去ろうとした時、ワニノコは言った。

「ありがとうございます！」

ライチュウとタツベイは背を向けながら手を上げた。

彼らの後ろ姿はどこかっこよく、勇ましい姿に見えた。

「行っちゃったね」

「そうだな。まさか、先輩達に会えるとは思いつたな」

「そうね。私たちは先輩達の期待にこたえなければいけないことになっちゃったけどね」

「いいじゃないか。もう一度出場したってな」

ワニノコたちは練習を再開した。

こうして、彼らの第一回スクールオブワールドチャンピオンシップは終わった。

しかし、第二回のスクールオブワールドチャンピオンシップがワニノコたちの目標となったのだった。

数カ月後になにが起こるかを知らずに……。

第二十三話終了全二十三話完結

第23話 「終結」(後書き)

サイトの一周年記念ということで連載を開始したこの小説も終わりです。

第一話の冒頭でも少し書きましたが、この小説は短編小説クラス対抗バトル大会のリメイク版もかねて作成したものとなっております。

この小説は、ワニノコ達の旅と人ポケ戦争の間に起こったことであるとされ、ワニノコたちも進級してしまう設定になっております。

なので、結構難しい状態での小説でした。人ポケ戦争とうまく内容を合わせないといけないのですからね。

おそらく、スクールオブワールドチャンピオンシップでセント学校が優勝するのではないかということを考えていた人もいらっしゃるのではないのでしょうか？

その予想を裏切り優勝をしなかったのも、人ポケ戦争との関連性の問題でそうになりました。

スクールオブワールドチャンピオンシップで優勝する実力なのに、人ポケ戦争でワニノコが負けるシーンがあれば、強さの矛盾が起こってしまいますからね。

もともと、国内学校別大会で終わらせるつもりでしたが、それだと小説タイトルと合わないため、何とかスクールオブワールドチャンピオンシップにまで引っ張ってきたというのもありますけどね。

それではここまで読んでいただきありがとうございました。次回
作にご期待ください。

執筆日：2006年12月15日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2063w/>

ワールドバトル

2011年10月9日15時03分発行